
魔法先生ネギま！ 幸福を望むもの～

クレトス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！

幸福を望むもの

【Nコード】

N5724S

【作者名】

クレトス

【あらすじ】

この話は神によって殺された青年が幾万の世界を旅し、最後の世界でネギの弟に転生して幸わせを目指す物語です。この話にはチートやご都合主義、ねつ造、アンチ成分さらにはハーレム成分を含んでいます。さらには更新が安定してません。極めて駄作です。それでも見てくれるならどうぞみてください。

プロローグ（前書き）

処女作です。

それではどうぞ。

4月22に指摘していただきました部分を改定しました。

プロローグ

どこか暗い雰囲気放つ部屋。

その部屋の石畳の床には不思議な光を出す魔法陣がある。

そして、その魔法陣の中に青年が一人。さらに、そのそばに立つ女性が一人。

どちらも一言も喋ろうとしない。

どれくらい時間が経ったのかも解らない。

そして、その沈黙を壊すように一人の女性が呟く

「ごめんなさい…」

静寂を破ったその言葉はとても暗く重い。

「ごめんなさい…」

またそう呟く。

しばらくして青年は顔を上げて

「大丈夫」

と明るく言う。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

しかし女性はまた呟く。

「ご、ごめんツ なさい…」

徐々に女性の声が涙声になっていく。

「大丈夫だから」

青年は明るく、そして優しく宿めるように言った。

「だって…、あなたはなににも悪くない！なににも悪くないのに！」

「仕方ないよ」

女性が激しく言うのに対して、青年は静かに言った。

「だからってこんなの…」

女性の言葉を遮るように青年は女性を抱きしめる。

「え…」

青年は驚いてる女性を抱きしめながら

「大丈夫。君が君でいる限り、俺は俺でいるから」

と優しく耳元でささやく。

「でも…」

「心配しないで。まさか俺がそう簡単に死ぬと思っ？そう思っぐらいなら俺のために祈ってくれよ」

青年はおどけた風に言う。

それに驚いた女性は、少し赤くなっただが

「うん！」

と元気よく頷いた。

魔法陣の光が徐々に強くなっていく。

「そろそろお別れみたいだな」

「そっみたいね」

女性は青年に顔を近づけると、

静かにキスをした。

優しく、ただ触れるだけのキス。

「あなたに幸福が訪れんことを」

青年は一瞬驚いが

「ああ、行ってくる」

と返事を返した。

女性が魔法陣から離れる。

魔法陣からは、さっきより強い光がでている。

それに伴い、青年の身体も徐々に消えてく。

女性は自分ができる精一杯の笑顔で見送る。

それが自分に出来る一番なことだと思っから。

そして青年は誰にも聞き取れないような小声で、

「今度こそ俺は自分の幸せを掴んでみせる」

と呟いた。

そしてその瞬間、青年の体は完全に消えた。

その後に残ったのは、魔力を失いたただの絵となった魔法陣と寂しそ
うに泣く女性だけだった。

そう、これは神よって故意に殺されて神の玩具として異世界を巡った

不幸な青年の幸福を目指す物語

ブログ（後書き）

どうでしたか？

次回は4月中までに投稿したいと考えています。

感想などぜひお送りください。

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定を載せました。

主人公設定

主人公設定

《名前》 エリク・スプリングフィールド

「真名」
「??？」

《年齢》 悪魔襲撃時は6才。原作開始時には15才（別荘を購入して使用していたため。転生前を含めて精神年齢は一億才を超えている）

《身長・体重》 「変装時」 142cm 28kg
「変装なし」 178cm 46kg

《髪・目》	「変装時」	紅髪	琥珀色
「変装なし」	金髪	紅眼	

《顔》「変装時」　ネギと同じようにしている。目が少しつり目で髪もやや後ろに伸ばしている。

「変装なし」　顔は整っており、眼が

キリツとなっている。髪はオールバックにしている。――（異世界に行つたときに零崎一賊に会い、その長男「零崎双識」に会つた際その愛情の深さと思いやりに感動しそれ以降彼と同じような格好をしている。）

《技能》 「探求者の秘宝」 あらゆる物を貯蔵し複製させる倉庫を展開することが出来る技能。展開を任意で選択することができる。彼はこの中に異世界に居たときに手に入れた宝具、宝剣、防具、銃、杖、魔法具などを入れている。その中には G A N T Z の武器や刀語の刀もある。

「道化師の記憶」 彼がもつ最高技能のひとつ。常時発動型。相手（人、物、怪物、e t c）を視るだけで相手の記憶、技能、才能、魔法、体質などをコピーすることができる。さらにコピーした能力を個々に選んで覚えることも可能。彼が今まで旅してきた異世界の住人たちの技能全て使うことができる。これは、重ねかけが可能で今のところは最大10人までが限界である。

「罪司者」（ツミヲツカサドルモノ）彼がもつ技能のひとつ。常時発動型。彼が「????????」を取り入れた際に手に入れた技能。効果は相手何か罪を犯したらそれがわかるという技能。彼はこれをただ便利技能とは思っていない。

「????????」 彼が取り込んだそれひとつで対なる意味をもつ財宝。今はまだ明かせないがこれから話が進につれて解っていく。これを元にした技能が複数ある。

《性格》 彼の性格は変わっている。他人には無頓着、無関心、冷酷、残酷という他人から見れば酷く歪んだ性格をしており、人を馬鹿にするのが得意としている。

しかし、彼が気に入った人、家賊と認めた人にたいしては別である。こういった人にたいしては自分ができる限りのことをするという大変変わった性格をもつ。彼の性格には「零崎双識」が大元となって

おり、彼が双識に憧れているのが原因である。

この世界に転生した彼の目標は「平穩に幸せに生きること」「ただそれだけ。しかし、英雄の息子として生まれた彼の目標はすぐ崩れることになる。そこで彼はある「計画」を実行する。彼は自分の幸せを目指してゆっくり、のんびり頑張ることをきめた。

主人公設定（後書き）

どうでしたか？

1話は今月までには投稿したいと思っています。

1話 村での日常（前書き）

今回は少しギャグパードです。

いまだに主人公のキャラが安定しません。

皆さんがこれを読んで少しでも面白いと感じてくれれば幸いです。

1話 村での日常

S i e d エリク

「ーそうね。あなたたちのお父さんはねーとっても有名な英雄（ヒーロー）…スーパーマンみたいな人だったのよ」

「スーパーマン？」

「そう。誰かが危険になったらどこからともなく現れて必ず助けてくれるのよ」

「へー。スーパーマン、かっこいいなー。ネカネお姉ちゃんも…」

ヤバイ。めっちゃくつちゃ寒い。

まじハンパない。

こう…寒さが槍みたく肌に突き刺す感じ。

ていうか、こんな寒い日なのによく外に行こうとするよな。

こいつら馬鹿なのか？

俺を凍死させるつもりなの？

そうか？そうなんだろ！

俺は寒いのは苦手なんだぞチクショウ

俺は旅行は北海道より沖縄派なんだぞ。

？？ああ、俺の番か。

まずは自己紹介からか？

皆さんどうも始めまして「英雄の息子」ことエリック・スプリングフィールド、今年で4歳になる。
ネギとは双子だ。

家族は兄のネギ、従姉妹のネカネ姉さん、祖父のスタン爺さんぐうらいか？

まあ、そんなもんか。

兄との関係は良好。

ていつかそうゆう風に振る舞ってる。

いま雪が降っている中、ネカネ姉さんとネギと一緒に出かけてる最中だ。

まあ、皆知っているかもしれないが俺はある目的…ていうか、目

標をもって転生した一（まあ、無理やりだけど）転生者だ。

なに？

知らない？

それじゃあプロローグ読んできてくれ。

さて皆に質問だ。

俺の転生の目標ていつか目的は幸せに生きること。これは絶対だ。
もう最優先事項。

ところが俺は魔法世界で16年前起こった大戦で世界を救った大戦の英雄「紅き翼」のリーダー「ナギ・スプリングフィールド」の息子だ。

さあここで質問。

そんな政治的にも重要な位置にいる俺がこれから先、静かに平穏に幸せに生きることができでしょうか？

…はい、もちろんN.O.ですよね。わかってますよ、こん畜生。

「お父さんどこか遠くへ引越しちゃったの？」

うるせえ。黙ってるや薬味。焼いて焼きネギにするぞ！

ていつか引越したとかじゃなくてさ、まず一緒にいないことに疑問を持つとうぜ。なあ。

え？なに？いきなり育児放棄ですか？子供なめてんのかよ、オイ。

せめてなんか財産残していけよ。金も払わないなんて一体どんな親だよ。親の顔が見てみたいよ。

いや、まあ顔は解ってるからいいけどさ。

ん？なぜかって？いい質問だ。それは《道化師の記憶》でナギとアリカを視てコピー。後は記憶を見て…といったかんじ。

ちなみに母親は「災厄の魔女」こと「アリカ・アナルキア・エンテオフュシア」ってさ。

いやね、記憶見たからどういった経緯で結婚したかも知ってるよ。でもさ、少し考えれば分かるだろ？

もう死亡フラグ建ちまくってんのよ。

天元突破してんじゃん。

ぜってー利用されるから。

もう断言する。

まだ幼なくて純粋な子供だから簡単に洗脳できしる。

…まあ、俺は純粹とは程遠い性格してるしな。

もちろん自覚はしてるし、俺は幸せをつかむなら何でもするしな。

変わらない幸せを得るには絶対武力が必要ということも異世界の旅でイヤというほどわかった。

閑話休題

まあ、そんなもんで鴨が鍋と野菜と茸を背負って懷石料理専門の料理人と一緒に来るようなもんじゃん。

おいしすぎでしょ。

鍋か？

鍋にするつもりなのか？

くそっ！俺は焼いた方が旨いのにつ！

「じゃが奴は死んだ。散々無茶やった挙げ句お前らをほったらかしてな…。バカな奴じゃよ」

「もうスタンさん。子供にそんな言い方して」

スタン爺さん居たんのか。

ていうか流石スタン爺さん。わかってるね。

流石だよ。今度愚痴を聞いてあげよう。

さて、文句一（という名の現実逃避）言うのはこの辺で終了して現実に戻りますか。

「あんたバカね。そんな事もわかんないの？」

訂正。もう少し現実逃避します。

アーニヤが来るとややこしくなるんだよねー。

面倒事は全部ネギに押し付ける。

これがエリククオリティ。

この間に計画に穴がないかもう一回調べますか。

そう、この4年間俺はずーっと現実に絶望して何もなかったわけじゃない。

平穏な幸せが絶対訪れないことが分かった3才のころから《探求者の秘宝》の中から魔法人形たち―（異世界に居たときに見つけたのを複製したもの。本体である俺とは記憶が繋がっているためどこで何しているのかはちゃんと分かる。）を使い、旧世界、魔法世界にある調査・行動させに向かせて計画の下準備をした。

まず魔法世界。魔法世界には俺たちを利用しそうな「メガロメセンブリア」通称「MM」の動向調査。

何かするにもせよ多分こいつらがしでかすはず。

内部に遊びに行く―（という名の潜入工作）ことで相手が何かするにもだいたいの動きは解る。

いまはこれだけでいい。

必要以上に手を加えてバレたらこっちが危ない。

それに、少しだけにすればバレたときにも帝国とアリアドーネの方に疑いがいくしな。

さらにこれから必要になるかわからないが「零崎一賊」の名を広めること。

これに関しては趣味や憧れも多少入るが、いざというときに使えるカードの数を増やしておくのが目的。

魔法世界では傭兵、盗賊、秘密結社、怪しい企業、汚職議員、など戦闘用魔法人形シリーズ、全89体――異世界に居たときに見つけた物を俺が魔改造したもの。高位の魔法使い並みに強いて思っている。――を駆使して「零崎」の名に恥じない殺しをしてもらっている。

勿論バレるなんて下手な事はしない。さらに、あらゆる場所で意図的「零崎」の噂を流している。

ちなみに今のところは「殺し名」第2位である。

第1位はよく解らない集団がいるがいずれ潰すつもりでいる。

本来ならば俺がさっさと潰すつもりだった^{道化師の記憶}たが肉体と精神がいまいち定着してないため技能が上手く使えない（は相手を視ることに記憶を見ることはできてコピーした技能を使うことができない。《探求者の秘宝》に至ってはそこそこ高いのは出せるけど「GANTZ」の岡の強化スーツや「刀語」の完全形態刀十二本などは出せなかった。――ため保留中。

いまは一賊と言っても1人しかいないが、これから「零崎一賊は有能な殺人鬼を募集しております。」みたいなノリで徐々に増やして行こうと考えている。

旧世界に関しては、これこそこの計画の真髄とも言えることで、いま38体もの魔法人形を使って太平洋に浮かんでる手頃な無人島を

大改造――（魔法などを使い面積を拡大など。）している最中だ。

ここは将来俺が此処に住むつもりなのでいろいろな建物を建てている。

たとえば医療施設、射撃演習場、剣道場、栽培施設、研究所、生産工場、図書館、自宅、サファリパーク、映画館、博物館、etc…などなど、かなり豪華にたてている。

さらには誰にも発見されないように認識阻害魔法、隠蔽魔法、人払いの魔法などを何重にも重ねてかけた上から光化学迷彩を使用しているため、これでバレる確率は無いはずだから安心して活動してもらっている。

ちなみに自分の趣味には金にケチはつけない性格だ。

え？

金は何処にあるかって？

そりゃあもちろん《探求者の秘宝》で黄金を大量複製したものを売ることで得てます。

もうウハウハです。

とまあ、それは置いといて。

そう！この計画の目的は幸せが無いなら自分で作ればいいじゃない！というコンセプトで生まれた、

通称「幸せ家作り計画」なのだ！

はは！どうだろう！羨ましいだろう！

……え？

ネーミングセンスがない？

うるせえ、ほっとけよ。

さて、計画について長々と喋っていたらそこそこ時間が経っていた。

さてさてネギとアーニヤはっ…

「なんですってー！」

「あぶぶぶぶぶぶぶっ」

駄目だ。悪化している。

なんだこいつ？

こいつ本当に俺の兄？

人を怒らこらす天才か？

まったく、早く帰りたいから仕方ないけど助け船を出しますか…。

「へい！その変態ツンデレツルぺたパイパンロリロリ露出狂マゾっ子アブノーマル幼女！俺と夜の渋谷で朝までGOGOしない？」

「んなっ……………！」

おお。自分でもかなりビクリする程スラスラとでてきた卑猥な単語。

きつと普段から無意識の内にこう思っているのだろうか。

ていうか何故か若干昭和要素が入ってんだろっか？

「あーんーたーはー！」

「どうした？変態ツンデレつるぺたロリロリ露出狂マゾっ子アブノーマル幼女のアーニヤ？」

「ムキーーーーーッ！」

おお。怒ってしまった。

まったく…なんて短気なんだ。

もっとカルシウムを取らないと駄目だな。

…まあ、俺もそんな事言われたら激怒するけどな！

「なによ！あんただってまだ6歳の子供の癖に！」

「違います。俺はもう16才です。」

「嘘よ」

「嘘じゃないよ」

「嘘じゃないの？」

「まあ、嘘だけど」

「どっちなのよーっ！」

本日二度目の大激怒。お疲れ様です。

「ムキーーーーっ！」

「どうどう。落ち着け。落ち着け」

「私は馬じゃない！」

「そんなんだから何時まで経っても少女のままなんだぞ」

「ムキーーーーっ！」

「ってネギが言ってたぜ」

「ええ?! 僕?!」

ネギに繋ぐキラーパス!

「あんたは——っ!」

「うわああああっ?!」

驚きながら困りながらアーニヤだったもの? から逃げているネギ。

それを見ながら俺は、

「ネカネ姉さん帰ろっぜ」

「ええ? でもネギが…」

「だいじぶ、だいじぶ、」

「で、でも…」

心配しているネカネ姉さんの手をひきながら俺はネギを見捨てることにした。

「助けて——っ!」

「待ちなさい!」

「ふえ——ん?」

ガンバレ、兄さん。

あ…吹っ飛んだw

1話 村での日常（後書き）

どうでしたか？

感想、指摘など、どんどんください。

次回は悪魔襲撃編です。

前半、後半と分けて投稿します。

そういえば何故MMは村を襲撃したんですかね？

いまいち分かりません。

だれか教えてくれませんか？

次回の投稿は水曜日です。

では、サヨナラ

2話 幸せかな？（前書き）

今回は主人公が使つ武器などの説明が中心になります。

皆さんに分かり易く説明出来るように書いてみました。

皆さんからの指摘、感想などをくれると嬉しいです。

2話 幸せかな？

sideエリク

まだ朝日が昇ってない夜明け前。

空は完璧な漆黒ではなく薄暗い紺色をしており、もうすぐ夜が明けるのを示していた。

辺りはまだ薄暗く、普段慣れ親しんだ森なのにどこか恐ろしさを感じれる。

今、俺は服装はボロボロの全身を覆うフードの下に黒色のジャージ、右手にはランタンを持っているという、日本なら国家権力が出勤してもおかしくないという完全なまでに変質者の格好をしていた。

しかし、此処は日本でもないし、森の周辺には俺がかなり高度な人払いの魔法を掛けているから、周りには誰も居ない。

何故そんな事をするのか？

その目的は2つ。

1つ目は自分は今のくらい戦えるのか、

2つ目は《探求者の秘宝》、《道化師の記憶》などの俺が持つ特殊技能がどれほど使えるかの確認。

これが今回、俺が森に来た目的だ。

「まずは…、ガンツスーツかな？」

《探求者の秘宝》を展開。自分の出したい物を頭の中で思い浮かべるように念じる。

数秒後、体に違和感を感じれるようになる。

体に密着するような感覚。

同時に体が軽くなる。

目を開けて確認してみると…

「懐かしいな…」

俺の体にはさっきまで着ていた黒色のジャージは無くなっていて、変わりに別の物が体を覆っていた。

「ガンツスーツ…いや、少し改造してあるから別物か？」

俺が呟くのと同調するように黒いスーツに付いているレンズ状のポインタが青く発光する。

ガンツスーツ

俺がとある異世界に居たときに使っていたスーツ。

その世界では、星人と呼ばれている強く、恐ろしい異形な怪物に対抗するような存在、謎の黒い球体「GANTSZ」に選ばれた死んだもの達が命を掛けて戦ってた世界。

このスーツは「GANTSZ」に選ばれたもの達が星人と同様の力を得られるように、本来なら有り得ないような高度な科学技術を駆使して作られたスーツで、着用者の身体能力を超人的なまでにする事ができる。

このスーツは中に特殊なゲル状の液体が入っていて、この特殊ゲルが驚異的な防御力と身体能力を引き出す。

試しに近くの木を殴ってみる。

「ハアッ！」

バキッという音と共に殴った木の部分が消し飛ぶ。

少しすると木が自分の重さに耐えられずに地面に落ちる。

魔法世界だとこれぐらい珍しいものだろうか？

この世界でも十分オーバーテクノロジーか。

「スーツは大丈夫か」

全身を包むスーツを確認するように見てみる。

殴ったはずの黒い手袋が付いている右手を見ても、血も傷も何ひとつない。

「次は武器だな。まずはXショットガンだな」

また頭で出したいもの念じるように思い浮かべる。

すると、手に不思議な形をした長身の銃が出てくる。

全体がスーツと同じような黒色をしていて、砲身が前後2つXの形になっている。

さらにトリガーが2つあり、上がロックオン、下で撃つという変わった銃。

ロックオン自体は複数可能。

さらに、ロックオンした対象複数に同時に射撃する事が可能。

弾は実弾では無く見えないエネルギー弾で、撃つとXの砲身が光り、相手に当たると、相手を中から破壊する。

スコープも付いており、後ろに付いているダイヤルでエネルギー量を、フォアグリップを引く事でエネルギーの収束率を調整する事が可能。

さらに射程圏は1kmと広いので応用が効いて、汎用性が高い一品

なのだ。

少し先にある腰ぐらいの大きさの石に向かってトリガーを引く。

するとギョーンと妙な音がした少し後に岩が凄い音と共に内部から爆発する。

「撃った少し後に壊れたか……。タイムラグは健在か。これどうにか出来ないか？」

その後はXガン、Yガン、ガンツソード、Zガン、ガンツバイク、コントローラーなども、問題なく出せた。

これだけ出せるなら普通の戦闘ならいけるだろ。

「さてと……」

ある意味ここからが本番。

本気でやらなければならない。

これさえあれば、チート級の相手じゃなければ、どんな相手にも勝てる。そんな武器。いや、兵器。

出せるかどうか分からないがやって見なきゃ始まらない。

出したいものはガンツスーツより強力なスーツ…というよりもアーマーみたいけどまあ、いい。

ガンツスーツの強化型スーツ

普通のスーツと比べることも出来ない程、高性能という兵器。

特徴といえば、大木よりも太いアーム。

大岩と同じ大きさの拳。

顔全体を覆うマスク。

普通のスーツだと一発で壊れてしまうような攻撃にも余力を持って耐えてしまう防御力。

そのアームは長くて、腕を降ろせば拳が地面に付いてしまうほどだ。

しかし、それを有り余って補ったしまうほどのパワーを備えている。

さらに両肘に付いている黒いブレード。

意外な所に付いているが、これが案外使い易い。

これを使えば敵を切り裂く事も、殴る事も出来る。

敵を殴る時に使う肘部分にブレードと同じ所にあるジェット噴出口。

これは、腕とリンクしていて、殴る時にはジェットを噴出。

それによりパンチを加速・威力を上げることが可能。

手のひらにはエネルギー発射口が付いており、対象部分を削り取るようなエネルギー弾を発射する。

顔全体を覆うマスクに付いている眼部にはレントゲン機能が付いていて、敵の弱点を探す事が可能。

使用時には甲高い音が出る。

更には、後部に付いている大量のドッキングコード。これを「巨大ロボット」に接続する事で操縦する事が出来る。

…などなど、かなり高性能なスーツ。

出せるかどうかは分からない。

この世界に来てから何故か技能が上手く発動しない。

普通のは出せるが、レベルが高いのは出せない。

個人的にはまだ転生してから年月があまり経っていないから、魂と体が完全に定着してないのが原因だと思っている。

だから今はまだ出なくてもいいと思っている。

だけど出せるなら早いうちに出せた方がいいとも思っている。

《探求者の秘宝》を展開。

頭に出したいものを思い浮かべるように念じる。

10秒経つ。

20秒…

30秒…

ついに5分経った。

確認するように身体をみる。

すると、右肘から上に向かって伸びる黒色のブレード。

成功したか？

心の中でそう思う。

しかし、

「失敗か…」

そう呟く。

その声には落胆の色が混じっていた。

肘までは良かった。

ブレードも出ている。が、そこから先を見てみるとなにもなかった。

「やっぱり駄目か。これさえあればかなり便利なんだけどな…」

心の中で「仕方ない」と自分に言い聞かせるように言った。

かなり無理をすれば出せるかもしれない。

だが、それで大怪我して入院…ということにはなりたくない。

故に諦めることにした。

「まあ、こんだけ出せば大丈夫だろ。次は《道化師の記憶》の技能コピーだな」

そう考えると同時に目の前にメニュー表がでてくる。――（ちなみにこのメニュー表は俺以外誰も見えない。）

そのメニューにあるコピー技能のコマンドを押す。

するとメニュー表の隣にまた新しいウィンドウが現れる。

しかし、ほとんどが黒くくすんでいて使えないことを示していた。

「うーん。少し使えるようになったか。でも《音使い》とか《虚刀流》なんかの特殊技能は全部アウトだな。やっぱり使えるやつがないのは痛いな。使えるやつもあるけどでも殆どが実用性のないやつだしな…。幸運技能とか俊敏技能なんかはいいけど、手品の技能な

んかは何処で使えばいいんだよ。」

愚痴をこぼす。

残りの技能を見てもあまり使えそうにないのが殆どだった。

ただ中には危機察知能力など使えるやつもあった。

その後、適当に技能を見繕って装備。

んでもって、ただ今のステータス。

F a e t 風…みたいに

C L A S S アーチャー？—（銃を使うから）

筋力	C	耐久	C
俊敏	B	魔力	A +
幸運	B	宝具	E X

保有スキル 【耐久性上昇】ガンツスーツ

宝具

- 【防御力上昇】ガンツスーツ
- 【身体能力上昇】ガンツスーツ
- 【不可視化】コントローラー
- 【幸運上昇】
- 【俊敏性上昇】
- 【危機察知能力】
- 【探求者の秘宝】
- 【道化師の記憶】
- 【罪司者】
- 【????????】

うん。こんな感じだな。

これで、戦闘になっても大丈夫だな。

まだやりたいことがあるけどもう夜が明けたし、そろそろ帰るか。
バレると面倒だからな。

《探求者の秘宝》で出した武器やらスーツを戻し自宅への道を急ぐ

ことにした。

うーん。最近、殺しかしてないし腕が鈍ってきたかな？

これを機会に鍛錬でも始めつか？

鍛錬用ゴーレムなら大量にあるから大丈夫だな。

…まあ、また今度でいつか。

今日も遊ぶか。

さて、今日はどんな事をしてネギで遊んでやろうかな？

カエルをたっぷり入れた穴の中に落とすか？

いや、魔法の訓練をするのもいいな。

アーニヤとネギと一緒に近くの洞窟を探検するのも捨てがたいな。

あれもいいな、これも捨てがたい。

んん？そついえば最近こんな事ばかり考えてるな？

やっぱり心の中で今の環境が心地よくなってんのかねえ。

転生する前はこんな優しい性格してたっけ？

俺はもつと残酷で冷淡で他人なんかどうでもよかったりとか考えてたり…

あーあ、やだやだ。俺はもつとコワレた筈なんだけどね。

まっ、こんな生活もいいけどさ。

元々幸せになるために転生したんだしな。

このぐらい、いいだろ。

今日もゆっくりとすごしますか。

最近これでいいかもしれないと、心のどこかで思っていた。

ネギとアーニヤをからかって遊ぶのがとても楽しく感じた。

ネギとたまに帰ってくるネカお姉さんと一緒に料理やお菓子を作るのが嬉しく感じた。

村の大人たち皆と会ってどうでもいい話をするのを期待してるのを感じた。

スタン爺さんと本当はいけないが一緒に酒を飲みながら、ナギについて愚痴をこぼす事や、どんな女性が好みか？何をしてみたいか？

など話し合う事に心を許せる友達をもつ懐かしさを感じた。

そう。

だからこそ、

希望を感じた。

これで、いい。と

これで、幸せだ。と

そう。

だからこそ、

油断した。

後から激しく後悔した。

そんな甘い幻想を抱いたことに。

死にたくなるぐらい自己嫌悪した。

自分がこんなに甘い性格になったことに。

とてつもないぐらいに腹が立った。

自分が望んでいた幸せが簡単に壊されたことに。

これ以上ないぐらいで恐怖した。

また、自分の望んだ幸せが壊れるんじゃないかと。

厳しく自分を戒めた。

二度とこんな気持ちにならないように。

そして、彼は嫌う事を決めた。

自分が自分で自分らしく自分らしさを保つために、

そして、彼は見捨てる事を決めた。

それが他人から最低だと罵られても。

この時はまだ知らなかった。

もっと早く初めてれば良かったと何度も思った。

そうすれば皆を救えたかもしれないと。

これは悪魔襲撃1ヶ月前の出来事だった。

2話 幸せかな？（後書き）

どうでしたか？

GANTZを知らない人にもわかるように書いてみたんですが…

W i kを参照にしました。

分かりにくかったら、漫画を見てくれると分かり易くていいです。

感想、指摘などお願いします。

3話 悪魔襲撃――前編――（前書き）

投稿です。

かなり遅れてしまいました。

本当にすいません。

今回はあまり出来は良くありません。

更に捏造も入ります。

武器の説明は後書きに載せます。

それではどうぞ。

3話 悪魔襲撃——前編——

笑顔。

彼の笑顔は眩しかった。

まるで、汚れなく咲き誇る黄金の向日葵のようだった。

彼の笑顔は輝きがあった。

その笑みは誰にもかかわらず降り注ぐ太陽みたいな光だった。

彼の笑顔は温かった。

まるで全身を包み込んでいるような不思議な安心感を感じられた。

彼の笑顔は希望があった。

なにかを望み、それを手に入れようとする必死さがあった。

彼の笑顔は魅力があった。

どこか人を安心させて、引き寄せるようなのを感じた。

そう。過去。

今はもうない。

全て「だった」になってしまった。

彼は変わった。

何時からだろうか。

彼の笑顔から眩しさが消えて暗さが増えたのは。

何時からだろうか。

彼の笑顔から輝きが失せて狂異が出始めてたのは。

何時からだろうか。

彼の笑顔から温かさがなくなり、何も感じない冷たさが感じられるようになったのは。

何時からだろうか。

彼の笑顔から「希望」がなくなり、「絶望」にかわったのは。

何時からだろうか。

彼の笑顔から「安心」させる魅力ではなく、「恐怖」させる魅力になったのは。

何時からだろうか。

もう彼に感じた「光」はない。

いま彼にあるのは「闇」。

全ての関係をリセットして、ただ自分のため、自分の家賊のために。

ただそれだけ。

他のものには興味さえ持たない。

「何時からそんなに変わったのか？」

誰かが彼に聞いてみた時、彼はこう答えた。

「何時から変わったのか？つて。それはアナタの勘違いだ。俺は何時から変わってないし、変わったこともない。ああ、ちなみに俺は嘘をつくことが大の得意な「戯言遣い」。つまり俺は自分を偽っていたワケでもなく、変わったワケでなく、アナタがだが騙されただけで、何時から変わったわけじゃない。傑作だよな、こうゆうのつて。まあ、つまりそうゆうことだよ。」

どこか平坦な声で、

なぜか早口で、

それが面白いことみたいに、

「ああ、そうだ。こんな事を聞くのも無粋だが、別にかまわないな。さて、アナタはコワシテもいい人間？それともコロシテもいい人間

「どつちかな？」

ハハハハハハッ、と

ずっと笑い続けるだろう。

狂ってる。

その眼に光はない。

あるのは黒く濁った欲望と酷く偏った価値観。ただそれだけ。

それは何時もと何ら変わらない日だった。

いつもと同じように村の皆が自分に声を掛けてくれる。

そして俺もそれに返事を返す。

何も変わらない。

ただいつもと違う事があるとすれば雪が降っていたことだった。

そう、ただそれだけだった。

その日はいつも日課としている山での簡単な訓練をしてた。

時刻は昼の12時。

場所は村からそう遠くはない木が生い茂った普通の山。

山周辺には人払いの魔法と防音の魔法、さらに隠蔽魔法を何重にも重ね合わせた自作複合型範囲結界魔法をかけてる。

ちなみにこの魔法はかなりの魔力が無ければ使えない。

莫大な魔力を持って転生した俺だからこそ出来る魔法なのだ。

この日は銃を使った射撃訓練。

いつも俺は訓練を始める前にある薬を飲む。

薬の名前は年齢増進薬。

金の粒と銀の粒の二種類あり、金が年齢を上げて銀が年齢を元に戻すのだ。

金の粒を飲んで年齢を実際に上げる。

詐称薬みたく誤魔化すのではなく実際に年齢を上げるのだ。

そこが特徴。

今の体だと身長が低くて、動き難い。

しかし、これを飲むことにより年齢を上げて身長を高くして訓練をしやすくする。

身長が高いのと低いのではかなり動きやすさが違う。

年齢詐称薬でもいいけど時間制限もあるし、なんか心配だし…。

でも、これなら時間制限ないし、《探求者の秘宝》に複製して入っているから出すのが楽チンだからこれをチョイス。

経済的にもこっちの方がいいしな。

《探求者の秘宝》から透明なガラス瓶にコルクで蓋がしてある年齢増進薬をとりだす。

一粒で5歳まで年齢を上げることが出来るから、蓋を開けて3粒取り出して飲む。

これにより元々の年齢6歳+15歳=21歳になる。

薬を飲んだ瞬間、体が燃やされると錯覚するぐらいに熱くなる。

…うえ…、気持ち悪い。熱い。

なにこれ？

毎回使っているけど、作った奴に文句を言いたい。

後味悪いし、胃がシェイクされる感じ。更に熱く感じるからなんかもう…………。

あまり使いたくないな、これ…。

少し時間が経つと熱が下がっていく。

それと同調するように気分がよくなっていく。

周りの景色が少し変わっている。

確認のため《探求者の秘宝》から適当にデカイ鏡を出す。

そして確認。

するとそこには長身、金髪、琥珀眼という女性なら全員が振り返るんじゃないかな？みたいな美青年がいた。

……自分で言うのもなんだけど、かなりのイケメンじゃね？俺。

これならハリウッド出演も夢ではない。

シュワちゃんみたいな肉体派でイケメンって設定でやれるな。

むしろ映画俳優で人生過ごすのも悪くはない。

目指せ！アカデミー賞！

まあ、そんなことしないけど。

身体の調子確かめるように手足を動かす。

動かしても全然違和感がない。

すごいな、年齢増進薬。

作った奴に敬意を示そう。

さつきと態度が全然違う。

これがエリククオリティ。

「うし。OK、OK」

特に異常を感じなかったから訓練を始めるためにとつとガンツス
ーツに着替える。

着替え終了

体にはガンツスーツを纏い、右左の手にはXガンを構えている。

XガンはXショットガンをハンドガンみたくしたもの。

XガンはXショットガンに比べると威力、射程距離などは低い。

しかし、Xショットガンより銃身が短くて取り扱いやすく近距離で
の戦闘がしやすいし、二重トリガーでロックオンすれば銃口の向き
に関係なく相手に当たるという利便性。

さらに、銃身の後方部分には画面が付いていて、Xレントゲン機能
で相手の弱点が分かるといふオマケ付き。

それなりに扱いやすい銃なのだ。

？「近距離ならガンツソードや威力を求めるならZガンを使えばいいじゃない」と思っかも知れない。

しかしだ。ガンツソードやZガンを訓練で使うとこの地帯が更地になってしまう可能性があるため出来ないのだ。

いや、実際に使った事がある。

そしたら、Zガンを使ったら周りの木が見えない広範囲エネルギー弾のせいでペッシャンコ。

ガンツソードなんかノリで最大まで伸ばして横に振ったらもう大変だった。

周りの木どころか隣の山まで刀が届いてしまったのである。

俺ビックリ。

山にいたおじさんもビックリ。

広範囲の修復魔法を使うのは出来るけど疲れるし、かなりの魔力痕が残るからそれを怪しく思わられてもアウト。

一度経験すればわかる。

しんどい。

もう一度言っ。

あれはしんどい。

だから今は使わない。

でも別荘を購入したら制限なく使う。

金ならたつぷりある。

しかし、まほネットにないのだ。

こういった魔法具は俺の《探求者の秘宝》にはないのである。

だからこそ欲しい。

もし買うならイーノック風に「一番いい奴を頼む。」（キリッと言いながら買う。

金ならたつぷりあるしな。

そしてそれを《秘宝》（長いから省略）で複製。それを研究してもつといいのを自作して使用と考えている。

セコいかもしれないけど異論は認めない。反論も認めない。

閑話休題

訓練方法は《探求者の秘宝》から簡易ゴーレムを出して行動フィードを設定。バラけさせた後にゴーレムを見つけて撃つといった形

の射撃訓練をする。

このゴーレムは動きは少し速くてちょうどいい。耐久性も問題ない。ちなみに形はドラクエのゴーレムのミニマムバージョンだ。

このゴーレムは《探求者の秘宝》に腐るほど入っているので数の心配はご無用。

訓練開始

上トリガーでロックオンして下トリガーで撃つ。

すると銃身に付いているX型の砲身が発光する。

ギョーン、ギョーン

変な音をだしながら見えないエネルギー弾がXガンから発射される。

それに少し遅れてから近くある

木に隠れてたゴーレムの体が内側から爆発するよつに破壊される。

また近くのゴーレムにロックオンする。

ひたすらこれを繰り返す。

ただ見れば簡単そうな作業。

しかし、簡単だからこそどれだけこの作業の時間、隙などを埋めるか、などが重要になってくる。

ひたすら連射して相手に隙を見せない。

これも俺の戦い方の1つだ。

その訓練をしながら俺はある考え事をしていた。

それは、ネギが最近無茶するようになった事について起きた事件についてだ。

犬の鎖を魔法で千切ったり、冬の湖に飛び込んだりと様々だ。

湖に飛び込んだ時はかなり危なかった。

偶々、俺が近くにいたからすぐに湖から引き上げて火の魔法を応用して体を温める。

そしてすぐに村にいる大人に助けを呼びに行った。

？俺の力があれば普通に助けられたのでは？

うん。まあ助けられるよ。それもかなり楽に。

でも今から変に目立った事をするとな面倒だったからパスした。

その後、医者に診て貰った後、ネギに会いにいった。

ネカネ姉さんは医者とネギの容態について話に部屋から出た。

一応家族だから心配して話をした。

その時にネギに「どうしてそんな事をするのか？」と聞いてみた。

予想は最近なにか不満でもあり、それを知らせようとしたのかと考
えていた。

しかし、帰ってきた返事は俺が予想したのからかなりかけ離れたも
のだった。

「ピンチになればお父さんが助けってくれると思ったから……」

……はあ？訳がわからない。

自分達を捨てた親が助けにくる？

本気でそう思っているのか？

有り得ない。

そう俺はネギに吐き捨てるように言った。

しかしネギは、

「違うよ！お父さんは助けにきてくれるもん！」

いや、絶対に有り得ない。

そんなくだらない妄想をするな。

その後、ネギと初めて喧嘩した。

言葉ではなく暴力でだ。

勿論、俺が勝った。

ネギは魔法こそ使えるが、それは簡単なのしか使えない。

もちろん「魔法の射手」なんかは使えない。

一方、俺は異世界に居たときから、何度も命を懸けて戦ったことがある。

当然、無手での戦闘もかなりできる。

経験、勘、才能、努力、全てに置いて圧倒的にちがうのだ。

どちらが勝つかは明白だった。

それは「喧嘩」と言うより「リンチ」の方に近かった。

だけどネギはそれでも言った。

お父さんが助けに来てくれると、

俺が間違っていると。

その後も喧嘩は続いた。

大人たちがそれに気づいて止めに来なければ大惨事になっていただろう。

その後、俺は大人たちに強制されながらもネギに謝った。

だが、その後もまた父親について口論になった。

その日からだろう。

俺からネギは離れるようになった。

俺はそれに乗るような行動をした。

だから俺も喋ろうとしなかったし、会おうとしなかった。

周りの大人たちは騒いでいた。

「英雄の息子たちがどうの……」とか「将来がどうの……」など。

俺の頭にある考えが思い浮かぶ。

簡単に言つと「ネギと縁を切る」ということ。

俺とネギは絶対に相容れない。

ネギはナギという「大戦の英雄」に夢を見ている。

しかし俺はそんなのに一切興味を見せないかなりの異端児。

周りから見ればネギこそが「正」で、俺が「歪」だろう。

ただでさえ「MM」は「英雄の息子たち」である俺とネギを引き入れようとするだろう。

未来の「正義の魔法使い」の旗本として。

ネギは自分から進んでその道を行くだろう。

いまのネギにとっては「親父」と「正義」は最高の餌だろうし。

しかし、そんなのは俺の「計画」にとってはただの枷にしかない。いい。

俺が幸せに生きていくためにはそんなのは必要ない。

だから俺はそれを否定する。

ネギが「光」で、俺が「闇」。

またはネギが「白」で、俺が「黒」。

つまりこと正反対の道になるのだ。

それなら今更親密な関係になる必要性がない。

だから今から関係を切った方が将来的に俺に＋になるだろう。

子供のときは「まあ、いいかな。」と思っていたが「計画」に不利になるなら別にいらない。

無理に爆弾を抱える必要はないしな。

必要のないものなどは、すぐに切り捨てる。

これは異世界で学んだ事だ。

出来るならネギだけ引き込んで、俺はほっというてほしいんだけどな
…。

面倒だけど、なんとかしてネギだけを「生け贄」みたいに出来ないか仕向けてみようかな？

俺の家賊ではないならどうなるうが別にいい。

ネギは「家族」だけど「家賊」ではない。

つまり俺の守る対象ではないのだ。

だからどうなるうが別にいい。

…やっぱり止めよう。

仮にも血が繋がっているのだ。

そこまで酷い事をする必要はないだろ。

元々、幸せになるために転生したんだし。

それにネギやアーニヤ、ネカネ姉さんとスタン爺さんを「計画」に含めるのもいいかもしれないし。

…昔の俺だったら今の俺を見た瞬間に斬り殺したろうな。

かなり甘い性格になってるし。

まあ、いいかな。

だったら早くネギとの仲直りの方法を考えなきゃな…。

気がつけば夜になろうとしていた。

辺りは既に薄暗い森に変わっていた。

雪が降っているせいか少し幻想的な風景になっている。

ちなみにガンツスーツには防寒作用も付いているから寒くはない。

しかし、周りを見ると思わず肩を震わせてしまうのだ。

本当ならもう少し早く戻るはずだった。

「これは少し搾られるな……」

背伸びしながら村の皆への言い訳を考えていた時だった。

それがわかったのは。

（……っ！……っ！……っ！）

頭に誰かの声が聞こえた。

頭に直接響くとなると念話か？

いったい誰だろうか？

（本体！聞こえるか？聞こえるなら返事をしてくれ！）

（ん？どうしたんだ。ていうか誰？どちら様？）

（説明が必要か？メガロメセンブリアで諜報活動しているお前の魔法人形18番だ）

（ああ、お前か。どうしたんだ？そんなに声大きいと頭に響くんだけど…。）

（ああ、すまん。そんなことよりもいいか、緊急事態だ。落ち着いて聞け。）

（緊急事態？）

（ああそうだ。いまある情報が分かった。「MM」が裏である村を襲撃することを企ててるという情報だ。）

（はあん、襲撃ねえ。）

（ああ、そうだ。戦力の内訳は高位の召喚士25人と護衛の魔法使い20人の合計45人だ。）

召喚士25と護衛魔法使い20人か…。

はあ？たかが村1つ襲うにしては多すぎる。

高位の召喚士なら悪魔ぐらい普通に呼べるし、その護衛の魔法使いもかなりの腕前だろうし。

竜種を狩りにいくならまだしも。

ただの村なんかほんの数分で終わるぞ？ そんな事する意味あるのか？

疑問に思った俺は18番に訳を聞いてみた。

（おいおい。そんなの意味あるのか？）

（普通だったら意味はないな。普通ならな……。）

（？裏があるのか？）

（ああ。その襲撃の目的は2つ。1つはイギリスのある村にいるかも知れない「災厄の魔女」アリカ姫の確認。）

イギリスのある村？「災厄の魔女」と関わりのある村って……俺たちの村か！？

（そしてもう1つ、「災厄の魔女」の息子たち、つまり本体と本体の兄のー）

やばい、やばい、やばいやばいやばいッ！？

総勢45人もの高位の魔法使いが村に来るのか！？

心臓の動機する音がやけに大きく聞こえる。

冷たい。

まるで全身の血が抜き取られて変わりたように体が冷たい。

ある予想が頭をよぎる。

最悪の予想だ。

かなり最悪でこの予想は外れて欲しいと願う。

（――排除だ）

その言葉と同時に村がある方角に振り返る。

その瞬間に村の方から激しい爆発音がする。

それと同時に村がある場所から火柱が登っている。

（本体も考えてるかも知れないが、あんな過剰な戦力で行くとなると、邪魔な目撃者は全員排除するつもりだろうな）

っ！ やっぱそうかよ！！

俺1人だけならこれぐらいなんともなる。

しかし、ネギやネカネ姉さん、村の皆は？

スタン爺さんは村の皆合わせれば軍一個大隊なら大丈夫など言っていたけどそれは準備を完全に整っていたらの話。

奇襲に高位魔法使い45人なんかきたら長くは持たない。

なんとかならないか？

村の皆は必ずしも応戦するだろうから、まだ被害は少ないはずだ。

皆を森に避難させるか？

いや、駄目だな。

俺の耳に情報が入って来なかったから、今回の襲撃事件はかなり慎重に計画されたのだろう。

つまり、作戦を立てた司令官的存在がいるのだ。

なら、ありとあらゆる事態にも備えてあるだろう。

当然周りの森はなんらかの対処が施されていると考えるのがいいだろう。

立てこもって迎撃するのは…これも無理か。

ここまで戦力に差があるとあまり効果はない。

なら、俺が叩き潰すしかないか。

………あれ？

おかしい。

今考えていたことをもう一度思い返す。

うん。おかしい。

なんで？

……なんで俺が普通に助けようと考えてるんだ？

もちろん今回は俺達が目的だから必然的に俺達が悪い。

村の人達は何も悪くない。ただの被害者。

だからここは普通原因でもある俺が助けに行くべきだろう。

俺なら楽に倒せる。

しかし、そんなの俺の知ったことではない。

それは村の人達には恩があるし、ネギやネカネ姉さんは血の繋がった家族だ。

しかし、個人的な事情で周りに被害を起こすなど日常茶飯事な事だ。現に俺が異世界に居たときも同じ事が何回、いや、星の数ほどあった。

三国志の曹操なんかいい例だろう。

敵国の女が欲しいために戦争したほどである。

「人妻欲しいからおめえら命張って戦えや」なんていわれたら誰でも泣きたくなる。

まあ、つまり仕方ない事なのだ。

家賊なら張り切ってたすけるけどな。

たぶんネギは殺されだろう。

ネギと仲直りしようと考えていた時間が無駄になってしまった。

なんか気は引けるけど仕方ない。

さっきまでの自分が嘘のようだ。

だけど元々はこんな性格だしな。仕方ない、仕方ない。

なんかさっきから「仕方ない」を連呼している気が…。

なんかこんな事考えていると「助けよう」と気持ちが無くなってきた。

まあ、ネギ。恨むならナギを恨めよ。

別に俺は既に避難しているからこのまま時間が過ぎるのを待てばいい。

そうすれば救助隊が来て後は楽チン楽チン。

全て解決。

俺幸せ。

さて、そう決めたならとつとと隠蔽魔法を自分にかけて終わるまでゆっくりしますか。

その時だった。

――――ギンッ――――

「――っ！」

俺は村のある方向にすぐ振り返る。

一瞬だが確かに感じた力。

この世に無いはずの力。

おかしい。

頭が冷や水を被ったように冷たくなる。

おかしい。おかしすぎる。

さっきまでだらけてた脳を無理やり動かして考える。

顔には冷や汗が浮かんでいる。

なんでこの力がこの世界に！？

いつの間にか手に力を込めていた。

あいつらはこの世界にはいないはずでは？

おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしい！！！！

さつき感じた力。

あれは間違いなくあいつらの力だ。

過去に何度も感じたから分かる。

だとすればあいつらが今この世界にいるということだ。

だが訳が分からない。

あいつらとの契約ではこの世界にはなにも干渉しないのでは？

何故？何故？何故？

ありとあらゆる考えが頭に浮かぶ。

……何はともあれ確認が必要か。

そう決めると《探求者の秘宝》を展開。

ガンツバイクは森が邪魔になるから駄目。必然的に移動方法は徒歩になる。

武器は姿を消せるコントローラー、近距離用にガンツソード。メイ
ンウェポンにZガン、サブウェポンにXガンを選択。

今回は緊急事態だから出し惜しみはしない。

ガンツソードとXガンを両モモに付いているホルダーに入れる。

左手に付いているリストバンドにコントローラーを装着。

右手にZガンを構える。

戦闘準備完了。

（18番！）

（なんだ？）

（お前は今回の襲撃事件の首謀者を調べあげろ。近くにいる魔法人
形を全部回す。）

（了解。首謀者はどうする？）

（なにもするな。今はまだいい。）

（了解。）

その返事を聞くと同時に俺は村へと走りだす。

「さて、かなり厄介になってきたかもな。」

俺はそう言いながら森へと入っていった。

その目には確かな殺気を交わせて。

3話 悪魔襲撃――前編――（後書き）

ここで武器の説明。

《コントローラー》

光学的の周波数を変えて使用者を不可視化する事が出来る。
この不可視化は第三者も使用者に触れているなら不可視化できる。
左手にあるリストバンドに装着する事が可能。
漫画だと東京メンバーの西がよく使っている。

《Zガン》

グリップを間に挟んだ形状をしている双身状の巨大な銃。
敵の上空に広範囲のエネルギー弾を真下に撃つことで、相手を押し潰すようにして攻撃する。
トリガーは2つ付いている。
スコープも付いている。

《ガンツソード》

黒色で曲刀の日本刀みたいな形をした刀。
普段は柄と鏢しかなくて、スイッチを押す事で刀が出る。
刀は伸縮自在。
最大まで伸ばすとかかなり重い。
切れ味はかなりいい。

《ガンツバイク》

ホイールバイク（一輪車）で円の内側に乗り込む。

操縦席の前部にはモニターが付いていて、塞がれている前方の視界を映し出す。

後ろにはダンデムシートがあり2人で乗ることを可能。

W i k 参照

いかがでしたか？

次回は後編です。

かなり原作と異なります。

皆様に面白いと感じれるように頑張っていきますので感想、指摘などよろしく願います。

3話 悪魔襲撃――後編――（前書き）

今回はマジ長いです。

文章ぐだぐだです。

原作完全無視です。

ナギさん空気

3話 悪魔襲撃――後編――

タンッ

何処からか地面を蹴り飛ぶ音が響く。

その音は一定のリズムを刻みながら「村だった」場所を飛び回る。

「村だった」場所。

この言葉を聞いた人は疑問を持つだろう。

しかし、一度でもこの村を見たことがある人なら分かるだろう。

かつての静かながらも活気があった村の姿はもうない。

殆どが木材で建てられていた建物は清らかで、山の中に建っているせいかどこか幻想的な雰囲気をかもし出していた。

しかし、今では殆どの建築物は原型を留めてない。

家は崩れ落ち、焼け落ち、破壊され、無事な物など何一つない。

村のあちこちからは出火しており、寒くて厚着しなければならぬ程寒かった村は今では薄着してても汗が吹き出してしまうほど暑い。

村は一種の地獄と化していた。

その地獄を黒い人物が跳ねていく。

その格好はなんとも奇妙で、首から足先まで黒いスーツのようなものを身に纏っていて、身体各所には青く光るレンズがついている。

更に右手には大きな「コ」の形をしたモノを持っている。

それを持ちながらその黒い人物は跳ねる。

いや、跳ねるといった表現は間違いだろう。

むしろ、飛ぶ、といった表現の方が正しいだろう。

その人物はそこらの家より高く跳躍しながら、自動車並みの速さで移動しているからだ。

しばらくして、その人物は村の開けた場所で飛ぶのをやめ、停止した。

「……この辺か」

そう考えると俺は跳ぶのを止めて地面に降下する。

すると、地面に降りる直前にブーツから圧縮された空気が吹き出て、地面に着地する際の衝撃を軽減する。

降りると同時にZガンを構え、いつでも撃てるようにしながら警戒するように周りを見回す。

その開けた場所の周りには無残にも崩れ落ちた家、そして人の形をした石像が幾つも立っていた。

？石像？

一見ただの石像

しかし、その石像に見たことがある顔が複数あった。

「村の人……？」

そう呟く。

確かに石像には何回も見たことがある村の人たちの顔があった。

皆それぞれ杖やら武器を構え、固まっている。

しかし、変だ。

確かに村には石像がある。

「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」をかたどった石像がある。

しかし、この村には「村の人たち」をかたどった石像なんかはなかった。

それが今、俺の目の前にある。

しかも、石像は全てかなり精密な造りになっている。

こんなのを人の手で造るには、かなりの日数が必要なはず。

そんな無駄なものを作っても意味ないし、なにより今日村を出る際にこんなのはなかった。

人の手の物ではない、だとすると…

「悪魔の石化魔法か…」

頭の中で納得する。

今、村には高位の召喚魔法士が俺達を殺そうとしている。

召喚系は、東洋魔法なら式神などで鬼などを召喚し、西洋魔法なら悪魔や魔獣などを召喚する。

つまり今村には高位の西洋魔術召喚士20人によって召喚された大量の悪魔の類がそこら中にうろついているだろう。

「ジュラシックパーク」ならぬ、「デーモンパーク」だな。

ドキュメンタリー映画にすればかなり儲かりそう。

アカデミー賞なんか目じゃなさそう……

撮影用カメラって閉まってあったかな？

おおっと、いけない、いけない。

思考がそれだな。

話を元に戻そう。

村の人が石化されていることから石化魔法を使える悪魔がいることもわかる。

見た感じにかなり高度で精密な石化魔法だった。

そんな魔法を使える悪魔となると、それなりの爵位をもった悪魔だろう。

つまりかなり強い悪魔が居るのだ。

全滅させるのはかなり厄介だろう。

しかし、今の自分にはどうでもいいことだ。

今の目的はあの力の発生源を探すこと。

その事さえ解決すれば、村がどうなるうが関係ない。

そんな人類として最低なことを考えながら、焼け落ちた村の開けた場所を進んでく。

進んでから1分もしないうち周りの景色に「異常」が見えた。

最初に分かったのは匂いだった。

燃えている家から漂う、木材が焼け焦げる匂い。

更にそれから出る煙。そのせいで視界が悪いのなんの。

焦げ臭く、それが目を刺激するせい、瞬きをする回数が自然と多くなった。

しかし、その中にある別の匂いが混じってるのが分かった。

生臭く、鉄を連想させ嗅いだだけでむせかえるような匂いがする。

異世界で何十回度、何千回も嗅いだことがある匂い。

血の匂い

それが分かったと同時に状況を判断するため視線を周りに移す。

すると、村の家が焼け落ちた場所の回りには幾つかの奇妙なモノがあった。

それを注視すると、それがなにかすぐわかった。

人

それも死んでいる人

頭と胴体が離れていて、首から川のように黒ずんだ血を流している人。

胸と頭に矢が突き刺さっていて、悲壮な表情をして絶命した人。

そんな様々な死体が辺り一帯の地面に無残にも転がっている。

それを見た瞬間に警戒心を一層引き上げる。

ここは普通なら悪魔にやられたと考えるだろう。

しかし、悪魔は武器などは使わない。

更には、切られた人の切断面も綺麗に別れてる。

つまり剣などの鋭利な武器を使ったのだ。

もう一度言っが悪魔は武器などは使わない。

悪魔は己の肉体のみを武器にする。

つまり、これは悪魔ではない人の仕業ということになる。

なら必然と武器などを使う召喚士の護衛の魔法使いがやったことになる。

だが、それも違う。

魔法使いは剣などはあまり使わないし、魔法剣士も矢など使う物好きはいない。

魔法道具なら矢を使ったものはある。

しかし、この矢は違う。

確認するために近くの死体から矢を引っこ抜く。

さて、矢などの矢尻には普通は鴨や鷹などの羽を使用する。

しかし、この矢の矢尻は羽などではなく、渦巻いた貝殻みたいな金色の金属が使われている。

（こんなのを使うのはアイツらしいじゃないよな…。）

ハア、と短いため息を吐き出す。

すると、矢が握っていた部分からパツキリ折れてしまった。

知らずのうちに手に力が入っていたようだ。

そして、またため息を吐く。

もうため息を何回吐いたことか。

（かなり厄介だな、こりゃあ）

そう思った瞬間、回りに幾つもの視線を感じた。

殺気

かなり強い殺気

それがわかると同時に右側に飛び出すように転がる。

カツ、カカカツ

直後、地面に何かが突き刺さる音

さっき自分がいた場所を確認すると、渦巻いた矢尻が付いた矢が6本、地面に突き刺さっていた。

（やっぱりヤツらか…）

そう心の中で呟くと、ザツ と地面を踏みしめる音が聞こえた。

それと同時に後ろから1つの声が聞こえた。

「初めましてかな？エリク・スプリングフィールド君」

どこか凜として透き通った声。

思わずひれ伏したくなるような雰囲気。

その言葉と同時に後ろを振り向く。

その声の主の姿が明らかになった。

1つの布を体に巻き付けた特徴的な服。

背中から生えた、普通の人なら有り得ない白く、清らかな羽。

頭の上には神々しく輝く円状の光。

「やつぱりおまえ等か……」

そう吐き捨てるように後の言葉を繋ぐ。

「神族！」

俺の前にいたのは、本来この世界に居るはずのない「神族」と呼ばれる奴らだった。

ここでまず神族について簡単に話そう。

神族とはありとあらゆる世界を創造し、管理している種族である。

言い換えれば世界の主みたいなものである。

基本的に神族は「神界」と呼ばれる所に住んでいる。

「神族」はかなり長寿な生物だ。

神族は主に3つに分類される。

1つは「聖人」と呼ばれる人たちである。

ここで勘違いしてはいけない事があり、彼らは基本「人」と認識される。

姿も特に普通の人とは変わらない。

彼らは神界で生活している一般人で、特に役職などはない。

しかし、普通の人類と比べると、かなり身体能力が高く、戦うなら「聖人」1人に対して「人類」は10人必要である。

「神界」で一番数が多い種族だ。

2番目に「天使」である。

天使とはいわば「聖人」の進化系で「聖人」より更に身体能力が上昇しており、頭に円状の光、羽が生えるなど身体にも特徴が現れる。

「聖人」とは違い、自己判断で役職に就くことが出来る。

「天使」になると主に2つの道がある。

1つは「魔界」などで魔物を狩り、「賞金稼ぎ」などになること。

もう1つは「神軍」に入隊すること。

「神軍」とは「神界」のトップである「神」に仕える軍隊。

「神軍」とは主に二つ役割がある。

異世界で何か問題が起きた場合、その問題を解決すること。

そして「魔界」への聖戦という名の「侵略」をすること。

「神軍」に入隊する「天使」は皆、ある目的を持って入隊する。

それは、功績を積み「神」となる事だ。

「神」とは「神界」で一番偉く、崇拜される存在のこと。

三種族の中でも一番強い存在。

「神界」でも何をしても許される存在。

姿は「天使」とは変わらないが、「神」一人一人が特別な「神具」を所持しているのだ。

その「神」の中でも一番偉い存在は「最高神 ゼウス」だ。

最高神ともなると莫大な力を持っており、「神」の中でも唯一、世界を創造することが可能なのだ。

さて、「神」になるのには二つの方法がある。

1つは「神」の子供として生まれる事だ。

「神」の子供ともなれば、殆どが無条件で「神」になる。

しかし、それだと「天使」は一生「神」にはなれない。

しかし、それを解決するもう1つの方法がある。

それは「神」たちから「祝福」を受けることだ。

「祝福」とは一定数の神から「こいつなら神にしてやってもイイ」と認めてもらった天使を「神」へと昇華させる儀式のことである。

「神軍」に入隊する天使は「祝福」され「神」となる事が目的なのだ。

さらに詳しい説明はまた今度にしよう。

「さて、もう一回聞くけど、君がエリク・スプリングフィールドだね？」

「そうだけど、そうゆうあんたは天使だな。」

「正解。（賞金稼ぎ）の天使だよ」

「はあ、そうかい、そうかい。で、その天使さんが俺に何用得？」

「ああ、用事ね。いやね、有名な君のことを一目見ようと、神界から来たわけさ。別に何もするつもりはないよ。」

天使はニツコリと笑みを浮かべながらそう答える。

しかし、そんなのは俺には通じない。

《罪司者》、発動

反応、2つ

種類、「嘘」

「おいおい、仮にも神族の天使が「嘘」をついてもいいのかい？」

俺は嘲笑うように言う。

《罪司者》は相手が何か「罪」を犯した際、それが何なのかが解るという「技能」

これがあれば「交渉」などの話し合いは負けることはない。

「いや、参ったね。バレちゃったか。」

「そんな理由でわざわざ天使がくるかよ。見え透いた嘘をつくんじゃないよ。大方、「あっちの俺」に用があるんだろ？だったら直接言えよ、バカ」

俺の誠心誠意、真心込めた「罵倒」が効いたのか、天使は笑みを浮かべるのを止め、

「ツチ。」

顔を歪めながら舌打ちした。

「んだよ。結局バレてるのかよ。だったら最初から殺しておくべきだったな」

そう天使が言う。

こいつ…、猫かぶっていたのか。

「なあ、やっぱり馬鹿だろお前？「あっちの俺」の事を知っているんだろ？」

「ああ、その通り」

「そしたらさ、お前みたいな三流が出来ると思ってるのか？そう思っているなら今すぐ大声で笑って爆笑したいんだけど？」

俺は天使に向かって挑発的な態度をとる。

この挑発は相手から少しだけ冷静さを奪うことが目的。

ほんの少しでも冷静さを無くせば、それだけで状況は変わる。

「おい、聞こえてますか？なにかヤバイヤツ決めちゃた天使さん」

また天使を罵倒する俺。

すると、またしても顔を歪める天使。

しかし、何か思い出したのかすぐににやけた表情になる。

ああ？何故ににやけるんだよ？

「いや、出来ないと思うだろ？普通。」

「まあ、そうだな普通。常考」

「でもね、今ならそれが出来るんだよね。なんだって……」

すると、馬鹿にするよう両手を広げて、

あ、やばっ――

「――《技能》を殆ど封印された君ならね!!」

瞬間、金属と金属がぶつかり合う音。

音の発生源は俺の真後ろ。

すぐさま後ろを向く。

「くそっ!!」

すると、そこには聖人が振り下ろした剣と、俺が振り上げたガンツ
ソードが火花を散らしていた。

ガチ、ガチチチ

鏑競り合いの状態。

――あつぶね! 殆ど条件反射で受け止めたから良かったけど、ガン
ツソードで身体能力上げてなかったら力負け!! 一刀両断されてたな
……ヤバかった。

そう安堵する。

だが、左手だけでソードを持っているため力が足りず徐々に押し戻

されている。

天使を牽制するためZガンを右手で構えている。

つまり左手でしかガンツソードを握れない。

状況は俺の方が不利。

そう思った俺はすぐさま聖人を引き離すため、右足を軸とした後ろ回し蹴りを放つ。

だが、それを察知した聖人は後ろに飛んで俺の後ろ回し蹴りを避ける。

「おいおい… 1人で来ないなんてフェアじゃないよな、フェアじゃ…」

そう天使にいうが、天使はニヤニヤした不気味な笑顔を浮かべたま何も言わない。

また状況を確認するように周りを見回す。

さっきから不気味な笑みを浮かべた天使1人。

そして俺を襲った聖人。

服装はさっきの天使と羽と円状の光がないだけでさほど変わらない。

武器は今両手で握っている両方に刃が付いている両剣と弓としては短い、弓矢一式を背負っている。

おそらくあの弓は短弓だろう。

更にその後ろに5人の聖人……って、おい待てコノヤロウ。

なんか増えてやがるし。

おいおい、え？なに？

袋叩きにするつもりかよ。

俺は肉じゃないから叩いても美味しくはならないぞ。

閑話休題

しかもこの6人。服装や武器もしかり、洗練された動き………かなり出来るな。

さながら、熟練された強者ってところか。

あとさっき言ってた「技能を封印された」って、どうゆう意味だ？

ていゆうか、なんでたかが天使が俺の「技能」の事を知っている？

確かに俺は今「技能」は半分も使えない。

せいぜい20%ぐらいだろう。

それをあの天使が知っているという事は何か関係性があるのだろう。

しかし、天使ごときに封印されるようなやわな存在じゃない。

ならどうして？

解らない。

さつきから頭の中で疑問と疑問が蜷局を巻いている。

しかも、答えが見つからねえ。

なんて無理ゲーだよ。

…考えてもしゃねえな。

右手にZガンを、左手にガンツソードを構える。

脚を踏みしめ力を込める。

呼吸を整えて前を見る。

「来いよ神族。何故に俺を狙うかは知らないが、俺の平穏な時間を乱した罪は重いぞ？」

そう言い放つと同時に剣と剣がぶつかり合う音が響く。

とりあえず、こいつらボコボコにボコってから情報を聞き出すとするか。

左手で構えたガンツソードを縦に振る。

すると、それに呼応するように天使も両剣を振る。

力と力、金属と金属がぶつかり合う音が広場に響く。

両剣とソードから火花が散り、手に汗が滲む。

力負けするのは分かっているのに、鏖競り合いにならないように、すぐさま力を入れ天使を吹き飛ばす。

その天使に追撃を掛けようとするが、俺から離れた場所にいる聖人が俺に向かって短弓から矢を放つ。

それを察知した俺は右足を後ろに引き、体の向きを変え、紙一重で

矢を避ける。

そして弓を放った聖人に右手で構えてあるZガンで上トリガーを引いてロックオンする。

すぐに撃とうとして下トリガーを引こうとするが、また別の聖人が2人、両剣を持って切りかかってくる。

それを左手のガンツソードを2mまで伸ばし横に一閃。

2人を牽制する。

それを聖人は後ろに飛んで避ける。

その後すぐにまた3本の矢が飛んでくる。

ソードを30cmの小刀の長さに戻し逆手に持ち変えて飛来する矢を切り落とす。

一閃、二閃

左手だけのせい、2本を切り落とすが1本を切り落とせず、体に吸い込まれるように矢が当たる。

だが、スーツの防御技能が矢の威力を無効化にし、矢は地面に落ちる。

すぐさま反撃のためにロックオンせず下トリガーを引いてZガンを撃つ。

トリガーを引くと同時に天使達の上空に見えない円状のエネルギー弾が出現。

それが一気に落下、地面が円状に凹み、天使を襲う。

しかし、それを天使はあらかじめ知っていたかのように散開し避ける。

すると、また別の聖人が両剣を構えて襲ってくる。

俺もそれに対応するために、ガンツソードを構え、反撃する。

かなり緊迫した状況。

一進一退の戦況。

その中で俺は今の戦闘について思考を張り巡らせていた。

何だよこいつら？こいつら何者なんだよ？

俺の武器の特性も知っている。

それだけで奇妙なのに、動きがかなり嫌な動き方をする。

たぶん何かしらの訓練をされてる。

何の訓練かは解らないが、俺に関するものだろうな。

しかも、聖人3人は剣を使った前衛、残りの3人は弓で援護する後衛。

そしてあの天使は的確に俺の行動を邪魔してくる遊撃的な役割。

聖人だけなら俺は簡単に殺せるが、それを防ぐように天使が入れ替わってくる。

そのせいで、俺の方が押されている。

こいつらかなり統制がとれている。

そうすると、こいつらはただの（賞金稼ぎ）じゃないな。

神軍か別の何かなのか？

何でもいいけどこのままじゃジリ貧だな……。

「技能」がないせいでここまで不利になるか……。

いや、あいつらが神族だからか。

普通の人類や生物なら問題ないが神族は色々な意味でチートだからな。

聖人なら今の装備でなんでもなるが、天使が一番の問題だな。

今はなんとか凌いではいるが、何時この状況が崩されてもおかしく

はない。

「技能」もろくに使えない今の俺には天使はかなり厄介な相手だ。たぶんそれを知っているから、あいつらはあんな余裕がまっているのだろっ。

だが、それが駄目だな。

相手を前にして余裕がましているなんて馬鹿のする事だ。

獅子だって兎を狩るときは全力を出す。

つまり、その考えが甘い。

砂糖と蜂蜜とブドウ糖を足したのを10乗したものより甘い！

幾ら訓練をしようが、どれだけ優秀だろうが、飛び抜けた才能があるうが関係ねえ。

こっちには今までに異世界で培ってきた膨大な「経験」がある。

絶対に越えられねえ「経験」という壁があるということを教えてやる！

俺はZガンを《探求者の秘宝》にもどす。

そして天使達に気付かれないように注意しながら、スモークグレネードを3個取り出す。

2つを手に持ちもう1つを腰に付けておく。

これはいざという時の予備だ。

そして自分の精神を一気に高揚させる。

すると、

キュイイイイイイイイイイ

スーツから奇妙な音がすると同時に体の各所に付いているレンズが更に強く青色に発光する。

それと同時にスーツの表面が網脈状に無数の筋が浮き上がる。

これはガンツスーツのもう1つの特徴である「精神や肉体が高揚する事でスーツの身体能力とパワーアシストが更に上がる。」というもの。

それを発生させ、身体能力を更に上げる。

両手を地面に付け、クラウチングスタートの姿勢になる。

そして足に力を込め、爆発させるように地面を蹴る。

そうすることで、距離にして50m近く有った6人の聖人との距離を一気に縮める。

「なっ!？」

一気に距離を縮められたことに驚く聖人たち。

しかし、すぐに冷静になり距離をとろうとする。

おお。すぐさま行動するのは優秀だな。

素直に驚く。

いきなり自分達の目の前に敵が現れたら行動出来る兵士はそうはいない。

だけど、遅いな。

俺は天使が離れる前にあらかじめ安全ピンを抜いておいたスモークグレネードを近距離で投げつける。

すると、スモークグレネードから俺と天使達を飲み込むように広範囲に灰色の煙幕が出る。

これで一瞬だが俺の姿を見失うはず。

それで充分だ。

すぐさまある行動に移る。

「全員煙幕から離れろ！あいつは中で俺達を各個撃破するつもりだ！」

天使が指示すると一気に聖人達は煙幕の中から脱出する。

そして、すぐさま全員で煙幕を円状に囲む。

俺がいきなり攻勢に出たこと、煙幕を使用した事で俺がかなり追い込まれていると考えたのだろう。

これで俺の首を取るつもりだろう。

だから後衛の聖人達も接近戦のために剣を抜いて構えている。

煙幕が晴れると同時に一気に決着を付けるつもりだな。

なるほど。いいセンスだ！

だが、そんなのは予想済み。

煙幕が風により段々と薄れていく。

後15秒くらいか。

天使達は何時でも切りかかれるように体勢を整える。

俺も次の行動に備えて準備をする。

煙幕が薄れていく。

天使達は剣を握っている手の力を強める。

俺もZガンを《探求者の秘宝》の中にしまい、両手でガンツソードを構える。

後5秒。

深呼吸して息を整える。

出来る限り、息を殺し、気配を遮断し、存在感を無くす。

そして、ついに煙幕が晴れる。

天使達は切りかかろうと一気に俺がいるであろう場所に飛び込んできく。

が……………

「……………いないぞ!? 何処へ行つた!」

しかし、そこには俺の姿はない。

いるはずの俺の姿がない事に動揺する天使達。

それにより一瞬だが周りの注意が逸れる。

それだけで充分。

今まで両手を前に突き出していた剣道の正眼の構え方から、左腰にソードを付け日本刀でいうとの居合い抜き構えになる。

そして、スイッチを押してガンツソードの刀を一気に15mまで伸ばす。

さっきまで軽かったソードが少し重く感じる。

だけど、これだけ長ければ全員に俺のソードが届く。

もう一度、自分の精神を高揚させ、スーツのパワーアシストを更につかめる。

スーツの表面が網脈状に無数の筋が浮き上がり更に力が増す。

そして脚を広げ、衝撃に耐えられるようにする。

更に両手を使い、ガンツソードの柄を握る力を強める。

そして最後に腕全体に力を込めて

一閃

関節を使い、肘を伸ばし、一気にソードを横に振る。

そうすることで、驚異的なスピードでソードを振る事が出来る。

ガンツソードを振った後に残る感触。

ヌルツとしていながら堅い感触。

これは人を斬った感触。

殺ったな。

確認するように前を見る。

前を見ると上空に5人の姿がある。

どうやら直感的に上に飛んで避けた奴がいたみたいだ。

しかし、地面には上半身がなくなったせいで、血が吹き出している
下半身が2つ。

2人仕留めたか。

あと5人。

「何処だ！？あいつは今どこから攻撃した！？」

「解らない！くそっ！2人やられたぞ！！」

「各自散開！冷静になれ！あいつは姿を隠しているだけだ！！」

天使が残りの聖人達に冷静に指示をする。

ていうかコレの特徴も知ってんのか。

そう、今の天使が言ったように俺は今「コントローラー」を使い周りの周波数と自分の周波数を同調させて自分の姿を消し、見えなくなっている。

さっきの煙幕は囷。

目くらましで襲撃するのではなく、一時的に俺の姿を隠し、その間に「コントローラー」を使うのが目的。

堂々と目の前で使用しても良かったが、効率性を考えて煙幕を使用してからにした。

そのおかげで天使達は俺の居場所が解らない。

さっきから右往左往している。

まあ、実際はこいつらの後ろに居るんだけどね。

今のうちに天使以外を片付ける。

天使は1人でもかなり厄介なため、他の奴らを先に倒し1対1の状況にする。

そうしなければ、今の俺には勝ち目はない。

最初の奇襲が功をせいしたのか、天使を除く聖人達は混乱している。
気付かれるのは時間の問題。

故にさつさと、早急に、迅速な判断で聖人達を始末しなければいけない。

次はあいつだな。

天使から一番離れた場所にいる聖人に一気に近づく。

「コントローラー」で透明になっているため、全く気付かない聖人

元の長さに戻したソード構える。

そして、

「え、がつ？」

横に一閃。

それだけで簡単に聖人の体を2つに分かれ、血が噴水のように吹き出る。

これで3人仕留めた。

残りあと4人。

「あいつは何処だ！何処にいる！！」

「解らねえ！見えないんだよ！！」

「落ちつけ！冷静にならなければあいつの思いつばたぞ！！」

慌てふため、混乱する聖人達。

ついさっきまで自分達の方が優勢だったはずが、今では追い込まれている。

まあ、慌てるのは当たり前。

だが混乱するのは駄目だな。

天使は冷静だが、聖人達はパニック状態だ。

パニック状態の奴を殺すのは容易い。

ソードをホルダーに戻して、《秘宝》からZガンを出し、右手で構える。

まだ俺の場所は気づいた様子はない。

天使と聖人3人が居る場所に照準を合わせる。

そして、

「っ!？」

トリガーを引くと同時に　ドン！　という轟音と共に円状に沈む地面。

しかし、潰れたのは3人の聖人だけ。

凄いことに天使は直感的に避けた。

やばいな。

今の一撃を避けられたのはかなり痛い。

これを避けるって、だからチート神族は嫌いなんだよな。

「そこか!!」

「危なっ!!」

そんなことを考えている俺に向かって天使は的確に矢を放つ。

俺はそれを左に飛んで避ける。

おいおい、こいつ今で俺の場所が分かったのかよ!？

姿は見えないはずなのに、どうやったら分かるんだよ。

やっぱり天使は強過ぎる。

これは時間が経つと俺の方が不利だな。

短期決着、一気に攻めるか。

Zガンを《秘宝》に戻し、代わりにガンツソードを更に一振取り出し両手で構る。

二刀流になり、一気に後ろに回り込む。

後ろに回っても、剣を構えたまま動かない天使。

よし。まだ気づかれてないな。

一気に決着を付けるため、すぐさま構える。

そして、ソードを上から下へと振り下ろし……

「っ！」

瞬間、剣と刀がぶつかり合う音。

鏖競り合いになり、火花が散る。

その衝撃に耐えられなかったのか、「コントローラー」の不可視化が解ける。

やばい！気付かれた！？

すぐさま距離を取るため、押し切ろうとして力を込める。

が、

「そうはさせない！」

俺が押し切ろうとするのを分かっていたように、天使も両剣を持つ力をさらに強める。

徐々に押し戻される俺。

くそっ！かなりヤバイ！

こいつ、かなり力が強いせいか、俺が押されている。

スーツのパワーアシスト技能を使っている俺を凌駕するなんて、化け物だな。

このまま鏖競り合いが続けば、間違いなく俺の方が力負けで死ぬだろう。

いくらガンツスーツの防御技能があっても、この一撃は防げない。

つまり、俺の死亡が確定しかけているのだ。

だからといって、死ぬつもりはさらさらない。

まだこの世界にきてから、目的の「幸せになる」ことを果たしていない。

だから、一か八かの賭けに出る。

賭けに負ければ俺が死ぬし、賭けに勝てば天使を殺せるだろう。

「これでっ……死ぬ！」

天使が俺を仕留めようと力をさらに込める。

俺はそれに対して、力を弱める。

今だ！

一気に力のバランスが崩れたせいで、天使の両剣が俺の刀を押して、

そして――

何かを斬る音が響く

そして、何か重量のあるものが地面に落下する。

その後に、赤い液状のものが吹き出る。

立っているのはただ1人。

そこに立っていたのは

天使だっだ。

天使は感じた。

ああ、殺った

アイツを亡き者にした、と。

自分は勝ったのだ、と。

それと同時に、身体からなんとも言えない、達成感が湧き出てくる。
精神が激しく高揚した。

「やったぞ！」と心に歓喜に溢れ、叫んだ。

本来なら、そうゆう事はしてはいけない。

歴戦の猛者としての品格が疑われるからだ。

しかし、それを無視してしまう程嬉しい事だった。

そして、もう一回叫ぼうとし……

「なあ、何がそんなに嬉しいんだ？」

出来なかった。

アイツが目の前にいる。

は？

なんでおまえがいる？

今死んだろ、おまえは。

ついさっき、自分が斬った死体を見る。

やっぱりアイツだ。

おかしい、おかしい、おかしい

いま、ついさっき、俺の手で、

なら、どうして此処にいるんだ？

「訳が分からない。」

思考が困惑し、天使はそう呟いた。

「ああ、やっぱり混乱したか」

「お前みたいな奴ほど、満心した時に異常事態が起こると混乱するんだよな」

「賭けは俺の勝ちかな」

それを見て、俺はさも同然という風に言う。

そして、

「とりあえず、くたばれや」

そう言い放ち、手に持ったガンツソードを天使目掛けて振った。

賭けの内容はこうである。

天使が力を込めた際、俺は力を抜いた。

それは、別に死ぬ為ではなく策の為だった。

天使が力を込めた瞬間に、右手で握っていたガンツソードの刃を天使の両剣の刃に対して斜めの状態にした。

鏢競り合いの時は、刃と刃は垂直の状態で交差していた。

それを右手のガンツソードだけ、斜めにした。

では、何故斜めにしたのか？

それはガンツソードと天使の両剣との滑りを良くするため。

なら、何故滑りを良くしたのから？

それは相手の両剣の威力をなるべく減らさないように、鏢競り合いから脱出するためだった。

俺はガンツソードの刃を斜めにした瞬間に、一気にソードを天使の両剣の先端へと滑らせ、鏢競り合いから外した。

それと同時に左手のガンツソードを放し、「コントローラー」を使用し不可視化になり、その場から離れる。

そして《探求者の秘宝》から「あるもの」を取り出した。

ホムンクルス

それも、俺にそっくりな顔をして、俺と同じくガンツスーツを着用

しているホムンクルス。

しかし、心など無く、只の肉体のみのホムンクルス。

実はこのホムンクルス、俺が訓練を始めた際に作ったものであり、元々は俺の訓練相手のつもりで作成したのだ。

だから、ガンツスーツも着用している。

それを俺が元居た場所に出す。

それを天使は斬ったのだ。

時間としては、2秒もない。

鏑競り合い時にガンツソードが離れなかったら俺の死亡。

離れても、脱出するのが遅れたら俺の死亡。

脱出しても、「コントローラー」の使用に気付いたら俺の死亡。

気付かれなくても、ホムンクルスを出すのを遅れたらバレて俺の死亡。

時間が遅れても俺の死亡。

かなり不利な賭けだった。

だからこそやる必要があった。

俺はその賭けに勝った。

天使はその事に気付かず、なんか叫んでいた。

よほど嬉しかったのだろう、瞳孔が開いてる。

まあ、頃合いかな？

「なあ、何がそんなに嬉しいんだ？」

「コントローラー」の不可視化を解き、天使の前に出る。

天使は啞然として、口をパクパクさせ、何もしゃべらない。

そして、無惨にも二つに別れたホムンクルスと俺を交互に見て

「訳が分からない」

そう呟いた。

「ああ、やっぱり混乱したか。」

いるんだよね、こうゆう奴。

「お前みたいな奴ほど、満身した時に異常事態が起こると混乱するんだよな」

異世界に居た時、何回も見た事がある。

「賭けは俺の勝ちかな」

そう呟く。

しかし天使は今だ信じられないという顔をしている。

まあ、別に良いけど。

こいつから情報を聞き出すのは無理そうだな。

「とりあえず、くたばれや」

俺はそう言い放つと同時にもう一本のガンツソードを天使に向かって振るった。

その瞬間に衝撃を感じた。

それも、かなり凄い衝撃。

いや、「感じた」のは間違いだろう。

「感じさせられた」との表現が正しいだろう。

目に映る景色が、高速に右から左へと、横に移動する。

それと同時に体に何回も何かが当たり、突き抜けて行く。

どうやら俺は賭けには勝ったが、勝負には負けたようだ。

少しすると、それは終わった。

衝撃を感じなくなり、景色も移動しなくなった。

今俺は多分地面であろう場所に倒れ、動かない。

確認するために脳を起こそうとしても、ガンガン揺れ動いてて、思考が動かない。

目も焦点が合ったり、合わなかったりと使い物にならない。

手も動かそうとしても、衝撃のせいか、全く動かない。

手も、足も、指も、脳も、耳も、何一つと動かない。

唯一動くとすれば、焦点の合わない目だけだ。

ああ？いまどうなってるんだ？

そんな事を働かない思考で考える。

すると、誰かに体を仰向けに動かされる。

「おーっ！だーじーー」

誰か紅髪の子だろうの人物。

何か返事をしたいが口が動かないし、あまりよく聞こえない。

「おい！だーじーぶー？」

だが、時間が経つにつれて少しずつ、解っていく。

それと同時に、身体が少しずつ戻っていく。

痛い

身体全ての神経から痛みが伝わってくる。

キユユユウウウ

聴覚である耳からは、何かが溢れ出る音がする。

「うーっ！だこー」

紅髪の子が何か叫んでいる。

そして視界が徐々に正常になっていく。

目の焦点がなんとか合わさり、周りの景色が何なのか判断できるようになっていく。

確認すると、左右には焼け落ちた家が並んでいた。

どうやら此処は村の住宅街らしい。

自分の視界の前には、家に穴が空いて、さらにその奥にも、奥にも、何個も何重に穴が空いている。

どうやら俺はあの広場から家突き破って、かなり飛んでいったみたいだ。

次に自分の体の確認。

首を動かし、そして、自分の被害を初めて知った。

まずスーツ。

どうやらスーツはもうだめだ。

スーツ各所に付いているレンズからは、黄色く透明なゲル状の液体が溢れて出ている。

これはスーツの耐久力を上回る衝撃のせいで、耐えきれず、スーツが死んだようだ。

スーツが死ぬということは、パワーアシストなどがなくなり、使用できなくなる。

こうなると、スーツはもうただのコスプレ衣装にしかない。

骨はどうやら折れてはないが、殆どがひびが入っている。

スーツが最後の力で守ってくれたみたいだ。

頭からはかなり出血している。

体の各所からも血が出ている。

満身創痍

この言葉が今の俺に一番当てはまるだろう。

「おい！大丈夫か？返事をしろ！」

紅髪の男が叫んでいる。

男の方に顔を向けると、ソイツは……

「ナギ……スプリ……ングフィールド……」

「おい！意識を取り戻したのか？」

俺を助けたのは、この世界での俺の父親である、「ナギ・スプリングフィールド」だった。

何でこいつが此処にいるんだよ？

まあ、大方村への襲撃を知ってネギと俺を助けにきたのだろう。

助けに来るのが遅いし、多分こいつじゃあ、天使の相手になるかどうか……

「おい、居たぞあいつ」

「おお、本当だ。ん？アイツまだ生きてるんじゃない？！」

「ん？確かに……ってアイツは誰だ？」

俺が開けた穴の方から声が聞こえる。

顔を向けると、そこには2人の天使がいた。

ん？2人？

確認するようにもう一度見るが、そこにはさっき戦っていた天使とは別の天使が居た。

ああ、なるほど。

俺をぶっ飛ばしたのはあの天使か。

頭の中で納得する。

どうやら油断していたのは俺の方だったらしい。

事の内容はこうだろう。

まず、あの最初の天使と6人の聖人達が俺と戦う。

それにより、俺の注意をそいつ等に釘付けにする。

別の方の天使は観察、いざという時の保険にしておいたのだろう。

別の方の天使は俺の行動、動きを把握することに専念する。

そして神術やらを用いてサポート、情報を伝える。

だから最初の天使は不可視化の俺の場所やら、行動が分かったのだろう。

ならあの聖人達は偽フェイクか。

なんと手の込んだ襲撃だろうか。

頭の中で考えを纏めていると、

「おい。その人間。今すぐそいつを渡せ。そうすればお前には何も危害をくわえない」

「くっ

！」

どうやらナギは天使の放つ圧力プレッシャーに当てられ、身動きとれないようだ。

その証拠に額には大量の汗が流れている。

「おいおい、無様だな。アルカ　そうか、今はエリック・スプリングフィールドだったな」

「なっ？エリックなのか！？」

ナギが驚いた声を出す。

それを聞くと同時に庇うように俺の前に出るナギ。　って、おい

「おい。邪魔をするな人間」

「へっ、悪魔だが何だが分からないが、コイツが俺の息子なら手出しはさせねえ！！」

額に大量の汗を流しながら、天使に向かって啖呵を切るナギ。

しかし

「邪魔をするな！」

「くうっ？？」

更にプレッシャーを強める天使に耐えられず、ひざを突くナギ。

おい、ナギえ。もうちつと耐えろや。

今のお前は俺の心の評価じゃヤムチャだぞ、ヤムチャ。

クリリンにさえ届かないぞ、それじゃあ。

ナギの横を通り、俺の前までくる天使。

「ったく、あの時はかなりビクッたぜ、おい」

「

」

「んだよ、何かしゃべらないのか？」

「

」

「まあ、その方が楽でいいけどな。」

「

」

「かなり時間はかかったけどこれで俺達は神になれるぜ！！超出世じゃん！！！」

ん？神になる？

俺の首と神になることが、何の関係があるんだ？

「おい」

「ん、どうしたんだ負け犬さんよあ？」

天使はゲラゲラ笑いながら俺の問に答える。

かなりムカツク態度だな、おい。

「どうして　俺の命　が神の出世とつな　がるんだ？」

なるべく死にかけているように演技しながら喋る。

こつちの方が油断して、ベラベラ喋ってくれる。

「ああ、そんな事が。それはなー」

「おいっ！それは極秘事項だぞ！！」

ナギにプレッシャーを放っていた天使が話に割って入ってくる。

「なあ大丈夫だつて。此処にいるのは俺とお前、後は死にかけてい
ターゲット
る目標と非力な人間ただ1人だ。なんも問題ねえよ」

「だからといってな、極秘事項をそつペラペラと喋るんじゃないー」

「大丈夫だつて。あと数時間後には俺達は2人そろって神になって、
神界の英雄になるんだからよ。このぐらいはなんでもねえよ」

「　だがしかしだなあ、」

「そんな怯えることないって。神になる前の前座だと思ってさ、な？」

「はあ、分かった。いいだろう。」

結局は許可する天使。

やはり嬉しいのか、顔が若干にやけている。

「冥土のみやげに聞いとけよ。まず、事の始まりは神界であるお触れがでたのが始まりだった」

「お触れ？」

「そう。お触れの内容はこうだ。」

神界で大罪を犯した者である、転生先の名前は「エリク・スプリングフィールド」を倒し、見事首を持ち帰った者には、莫大な報酬と聖人、天使、男女関係なく「祝福」の儀を執り行う事を此処に宣言する。

尚、罪人は今神の封印により能力、力が各段に下がっているため討つなら早急に行動したほうが得策だ。

諸君の働きに期待している。

「全知全能の最高神 ゼウス」

「だとさ。それで俺達はそれに乗ったってわけさ」

「……………」

今回の事件の真相は

俺を討てば神になれて

莫大な報酬が渡されて

だから俺を襲撃した

なんとも美味しい話だな。

今、俺の心の中は熱い。

情熱などという明るいものではなく、

悲しく、泣きそうなどという美しいものでもない。

憎しみ

何処までも醜いそれが心を熱くする

怒り

際限ないそれが心の熱を上げる

つまり、アイツが犯人か。

条約を破って、俺の転生した世界に干渉したアイツ。

やっと掴めそうな、俺の幸せを奪おうとするアイツ。

今頃、神界の王座でほくそ笑んでいるだろうアイツ。

そして、

何万、何十万という世界を俺が旅することになった原因である、アイツ。

そして

晒してやんよ。

怒りを押し殺し、冷静になる。

アイツをこの手で始末するのには、この状況を切り抜けなければならぬ。

ならば、冷静になれ。

冷静になって、考える。

切り抜けるための手段をすぐさま探し、検索する。

何か、何か、何かあるはず。

この状況をひつくるめる何か、

幸いに天使2人は油断している。

ならば、今がチャンス

思考を回転させ、考察する、

自動AIを起動

戦略的プロトコルを表示

「技能は？」

殆どが稼働率が低下

《探求者の秘宝》 46%

《罪司者》 98%

《道化師の記憶》 19%

《??????》 10%

その他複数の技能は使用不可

「直接作用する原因は？」

神による神術型封印によるものと断定

「解除は？」

かなり精密で硬質な封印、完全解除は9%の確率で可能

OK OK

sonだけあれば、充分だ

全て解除しなくてもいい

半分も解ければ充分

「今すぐ解除を開始」

しばらくお待ちください

解除中…… 解除中……

術式を解読中……

100% 完了

パターンを分析中……

100% 完了

構築式を解読中……

100% 完了

変換用術式を構成します

構成中……

100% 完了

パターンと術式を同化中

同化中……

同化中……

100% 完了

以後、このパターンを保存します

構築式と変換用術式を同化させます

同化中……

同化中……

同化中……

同化が完了しました。

神術型封印の51%を解除しました。

「なあ、そろそろ殺して、帰ろうぜ」

「俺的にはもう少し楽しみたかったが、時間もそうだし、そうするか」

最初の天使が俺の方を振り向く

「まっ、恨まないでくれよ。俺達は帰って祝杯を挙げなきゃならないんでな」

天使はさも罪悪感など無い、といった表情で言う。

俺はそれに対して

「同感だ」

こう返す。

「俺も帰って祝杯を挙げなきゃならないようだ」

冷静に考え、次の行動の準備をする。

「は？どうゆう意味だよそれは？」

その返しに疑問に思ったのか、天使2人は声を出す。

「それは後で分かるさ。」

息を吐いて、傷ついた体を地面から引き離す。

傷ついた全身が痛み、激痛が走る。

フィードバックを開始

身体の損傷を修復します

使用可能な技能を表示します

《探求者の秘宝》 82%

《罪司者》 100%

《道化師の記憶》 73%

《??????》 15%

その他複数の技能は使用不可

充分、充分だ

俺は天使2人を見ながら堂々と言い放つ。

「細工は流々、小細工無用。さて…」

決めるのはこの言葉

「零崎を始めよう」

速攻KOで終わる第2ラウンドといこうじゃないか。ええ？

「おい、おまえ何言ってるんだよ」

最初の天使はそう腹を抱えて言う。

余裕、余裕すぎる。

そう天使は思った。

立ち上がった事に驚いたものの、相手は死にかけの人間ただ1人。

負けるはずがない。

自分達は猛者。言い換えればエリートだ。

だから何も怖くない。

そう感じた。

「実に惜しいが、俺も疲れている。速攻で、とっとと秒殺して終わらせよう」

俺は腰に付けていた予備のスモークグレネードを手で掴む。

少し凹んでいるが大丈夫だろう。

スモークグレネードの安全ピンを抜き、地面に落とす。

距離は近いから、煙幕の範囲内だ。

すぐさまスモークグレネードから煙が出て、エリクを含めた3人を飲み込む。

「その手は何度も食らわない！」

すぐさま煙幕から離れ、煙を翼で吹き飛ばそうと準備する。

「おい、この煙幕を散らすぞ。おまえも手伝え！」

そうまだ煙幕の中に居る仲間に指示をする。

しかし、何も返事が返ってこない。

中で戦っているのか？とも考えたが、それだと剣戟の音がしないため、これも違う。

「おい、いい加減遊んでないで出てこいよ？」

少し疑問がかった声で仲間を呼ぶ。

すると、煙幕に人の姿が浮かび上がる。

最初はアイツか？と構えたものの、背中あたりに天使の羽とわしきシルエットが浮かび、構えるのをやめる。

「おいおい、心配させるなよ。てっきりアイツにやられたのかと……」

その言葉は続かなかった。

別の天使が煙幕の中から出て来た。

その姿を見て、絶句した。

両足はある。腕も二本付いているし、その手には両剣が握られているし、天使の象徴である羽もある。異常なことなど何も無い。

それ以外には、異常はない

それ以外には。

姿を見た少し間を空けてから気づいた。

在るはずの頭が、綺麗に、すっぱり、無くなっているのだ。

頭が無いのに、こちらに向かって歩く天使。

そして自分の前に来た瞬間、膝を折り、地面に付け、

首から見事なアーチを描きながら、紅いドロドロした液体が吹き出す。

「あつ……あ、あああ！」

混乱して、口からは変な言葉しか出ない。

仲間がやられた？

誰に？

アイツに？

アイツしかない！

混乱した頭で結論をはじき出す。

すると、煙幕の中から一つの影が現れる。

機械の駆動音を響かせ、その影は姿を表す。

それはエリクだった。

しかし、さっきまでの格好とは違う。

両手には地面にまで届く長さの、巨木を連想させる黒腕。

両肘には黒く長い刃が存在感を示す。

肩には数本のドッキングコードが地面にまで伸びている。

そしてエリクが右手の黒腕に携えているもの。

それは天使の仲間の首。

さっき自分が見た表情と何一つ変わらない。

それが余計に恐怖心を引き立てる。

「いつ、嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ！」

何度も叫ぶ天使。

逃げよう。

今すぐ、此処から、遠い場所に

そう考え、背を向けようとする。

が、

「おいおい、それはないなー」

声をかけられ、動かなくなる。

いや、動かなくなる。

「さて…そろそろ時間がないからね、俺の技で決めようか」

「あっ！ああっあああ！！」

声といえるのか怪しい悲鳴

「なあ、お前もフュージョンしようぜ？」

強化スーツの巨大な右腕を伸ばし、指を合わせ手刀の形にする。

次に左手を握りしめ、拳の形にする。

そして、両肘を腰に付けるように構えて――

「我流変化型虚刀流一の技――」

力を込め、一気に――

「斬頭殴体^{サンリ}」

横っ腹に肘のジェット噴射で強化された手刀を叩き込み、反対側の腹にこれまたジェット噴射で強化した拳をねじり込む。

天使が移動しないように、高速で拳を打ったらその反対側に手刀をたたき入れ、

手刀を下から上へと突っ込めば、拳が上から下へとねじ込む。

「殴体」

殴る、切る、殴る、切る、殴る、切る、殴る、切る

それをひたすら繰り返す。

打撃音と骨が碎け散る音が鳴り止まない。

顔以外の全身の骨を折り終わると右足に力を入れて、思いつきり顎

目掛けて蹴り上げる。

顎の骨が砕ける音が響くと同時に、天使の体が高く空に舞う。

高さは悠に15mを超える。

衝撃による飛行が最高点まで達すると、そのまま落下する。

今までの衝撃のせいで、意識朦朧として何も行動できない天使。

人体は落下する時は、重い頭が下に来る。

その通りに天使の体は頭が下の体制で自由落下してくる。

左右両手の手を手刀の形にする。

そして、天使の頭が落下してきた瞬間、

「斬頭」

左右の手刀により天使の身体は、首とその下からきっちり二つに分けられた。

そしてそのまま地面に墜落する頭と胴体。

「まあ、フュージョンするのは俺とじゃなくて、地面となんだかな」
そう死体に聞かせるように呟く。

まあ、とりあえず俺の勝ちだな。

《探求者の秘宝》に強化スーツをしまう。

さっさと帰って祝杯挙げなきゃな？

3話 悪魔襲撃――後編――（後書き）

ぐだぐだな文章でした。

これで東方も書こうって言うんだから仕方ない

批判は受け付けたくない

しかし、感想、指摘はマジ欲しい

欲張りな俺

4話 始まりの知らせ（前書き）

ギャグと今後の舞台の知らせ

急いで書いたため、出来は不安

ゆっくりしていつてね！

………できる程長くはないが

* 5 / 28 少し編集

4話 始まりの知らせ

イギリスにある、とある病院。

レンガ建てのこの病院は築30年は経っており、いかにも「昔の病院」といった雰囲気をかもし出し出している。

規模にすると中ぐらいの病院だが、あまり入院患者等の来訪者はいない。

しかし、設備や医療器具などはどれも最高級でそこらの大病院が顔負けのほどだった。

それもそのはず、この病院は「魔法使い」専用の病院の1つであり、「M・M」が金を出して建てた国家病院。

それ故、機材や働いている看護師、医者などは全て一流の魔法使いだ。

そんな病院も、もう真夜中なので全ての病室は明かりは落とされ、暗闇と静寂が病院を支配していた。

そんなとある病院のとある病室にあるとあるベッドにエリクの姿はあった。

ノートパソコンを持ち込み病室のベッドに置き、ひたすらキーボードを弾き、打っている。

一心不乱に何かを打ち込んでいるその姿は、出来るエリートビジネ

スマンを連想させるだろう。

そんなエリクの側にはひとりの青年がいた。

顔も普通で特に挙げる事はない。

彼はエリクの所有する魔法人形の1つで、エリクの命令で「M・M」の調査を担当している魔法人形18番。

何故彼がいるのかというと、彼は今回、「M・M」の件について報告しようと、こうしてエリクのもとを訪ねた。

しかし、そんな彼の報告はおろか存在さえ無視しながら彼はノートパソコンの画面とひたすら格闘していた。

目つきは冷静で、何かを考えるように顎に手を当ててる。

「なあ本体。頼むからそれだけは止めてくれないか」

「……………」

彼が苦虫を潰すような顔で言う。

それは彼の心からの叫びだった。

そんな彼の制止の声を無視しキーボードを打つエリク。

「本体が今回の襲撃の件で虫の居所が悪いのは分かる。そりゃあクルト・ゲーデルの監督が行き届いていないのが悪い。」

「……………」

「でもな、こんな事はしてはいけないんだ」

「……………」

更に声を掛ける彼。

再三の彼の叫びを聞き、エリクも彼の方に顔を向ける。

そして――

「頼むからっ！頼むから「まほネット」にクルト・ゲーデルのホモ画像（エリク自作）を流すのはやめてくれっ！」

「だが！断る！」

エリクの力強い拒否の言葉を聞き彼は肩をガクリと落とす。

自分の主人がこんな人として最低な事をしていたら落胆するだろう。義に厚い関羽さえ主人である劉備にキンニクバスターを決めているに違いない。

ちなみにエリクのノートパソコンの画面には

「発覚！！クルト提督の夜のラブホテル生活！！？お相手は超有名拳闘士のあの男性！！合体画像流出！！？」

そこには、クルト提督の顔とジャック・ラカンの顔がハッキリクッキリしわの数も解るぐらい写って裸で絡み合っている悪魔の聖典（ホモ、ゲイ写真）が何十枚も写っていた。

ちなみに、この写真はエリクが自分の持ちうる才能、機材、道具を利用し作った偽装写真であることはあしからず。

しかも、コメントには、

《ちょ、俺の股間のIBMミサイルが臨時発射体制なんだがww》

《カラダが熱く、止まらないZE！！》

《クルト提督の合体写真…………ふおおおおおお！》

《俺の就職先はMMに決まった、今決めた》

《速報！M・Mはゲイの理想郷になったようです》

《俺の夢の国へのパスポートは何時発行しますか？》

などと、本人が見たら体中から血液を吹き出し、最後に爆発する程おぞましいコメントがあった。

本体のせいで国が腐りかけている！？

それに気づいた彼は orz の体制になり、M・Mにいる普通の国民に向かって全力で土下座することにした。

それを落ちこんでいると勘違いしたエリクが彼に言う。

「いいかよく聞け。俺も本心でこんな事をしているわけではない」

「はあ？」

エリクはやれやれ、といった感じで腕を振る。

「俺はな、激励のつもりでこれ（ホモ画像）を流すんだ。今回の事にめげずに頑張れ、という俺の美しい意志なんだよ。決して腹いせなんかではないんだ！！！」

「で、本心は？」

「まあ、簡単な暇つぶしになるかなと思って」

彼はジト目でエリクを見る。

しかし、エリクはそんなのどこ吹く風と言わんばかりに無視を決め込む。

「そんな事をやっている」と「M・M」に目を付けられるぞ」

「大丈夫だ。俺はスカイネット相手に電腦戦で勝ったことのある天才ハッカーだからな。問題ない」

「ああそうだったな。記録にはたかがコンピューター相手にサイドワッダー（アメリカ製 航空機搭載戦術ミサイル 赤外線ホーミング付き）を23本ぶち込む大馬鹿コマンダー（軍人）だったな」

「違う。コンピューターではない！スーパーコンピューターだ！」

割とどうでもいい事にうるさいエリックだった。

しかし彼も徐々にエリックの扱いに慣れたのか、話題を変えることにした。

「そういえば本体。あの襲撃の後はどうなったんだ？」

「女の子とイチヤイチャしてまー」

「くたばれ」

「おkおk、分かったからその手に持ったナイフをしまつてくれ。今ガンツスーツ着てないからマジヤバいんだって！」

「ちっ！分かったよ……」

「え？今舌打ちしたよねコイツ。主人に向かって舌打ちしたよね？」

「いいから言えよ」

「襲撃の後始末しました」

「後始末？」

「詳しい事は回想で説明する」

回想開始

結局その後、俺は祝杯を挙げる事はできなかった。

なぜなら死体処理、俺の戦いを見た者の記憶削除、などなど戦いの後始末をしなければならなかったからだ。

まずは聖人6人と天使2人の死体処理。

基本、天使達「神族」はこの世界では誰も知らない存在の為、隠蔽工作や後処理をしなければいけない。

知られてしまうと下手すれば「神軍」がこの世界を排除しに大挙して来るからだ。

普通なら「世界」ごと最高神ことゼウスが消してしまえばいいのだが、俺が転生する際、あらかじめ「??????」を使い「この世界」を”浄化”したためそれができない。

貼れる予防策は貼っとく。

これ常識。

それのおかげでゼウスのクソ野郎にもう一度復讐出来るのだから予防策様々だな。

流石にいくら《技能》を半分取り戻した俺でも10万の神族相手に1人で戦うのは厳しい。

もう昔みたいにハッスルできないのだ。

そんな「映画」みたいな事は異世界で散々やってきたからもういい。

具体例を挙げると、

「スパルタ副隊長として、たった300人でペルシア軍100万とガチでバトる」

とか、

「某二重口エイリアン（無数）相手に某ブレデターさん3体+俺in 未知の惑星で1日中戯れたり」

とか、

極めつけは、

「某宗教国家コブナントの宇宙艦隊を3隊相手に、俺＋スパルタンスーツ着用（1人）で殲滅する」

など様々だった。

何とか全部成功させた。

ここまで活躍すればもう英雄王と言っても差し支えないだろう。

金髪だし、「王の財宝」みたいなも持ってるし大丈夫なはず。

これは明日からはもう黄金の鎧を着て生活するしかないな。

閑話休題

そんな厄介事を避けるために、後処理はしっかりする。

まず死体処理。

聖人のうち3人はZガンで潰されて液化化されたからそれを回収、瓶に入れ《探求者の秘宝》の中に放り込んでおく。

研究素材として役に立つだろう。

そして、残りの天使2人と聖人3人の死体は1つにまとめてガソリンをかけて燃やし焼却処理、それで出た灰はあとから山にばらまく。決してとある映画の真似をしなくなった訳ではない。

あと武器。武器は処理するのは勿体無いから全て回収、《探求者の秘宝》にしまい込む。

神族の武器は貴重だからな。

前回戦った時は回収する暇がなかったから、今回は戦利品として貰って。

「泥棒するな！」

？泥棒だと？なんて事を言うんだ！

プレデターは死体から頭蓋骨を戦利品として取り出すんだぞ！

それに比べたら、このぐらい可愛いもんだろ。

むしろそれしかしなかった俺を誉める！

「比べるもなにも住んでいる星自体が違っただろ！」

まあ、そうだけどさ。

ていうか、回想にまで入り込んで来るんじゃないよ。

突っ込みはもうお腹いっぱいなんだよ。

おなかパンパンまんになってるんだよ。

さて、コレを改造してオリジナルの《アーチ》などを作るべきか？

神族の武器だから、大体同じだろ。

多分爪楊枝として使い道が在るはず。

《探求者の秘宝》の中にも10本あるが、どうせなら自分でも作ってみたい。

プラモデル的な感覚で作れるだろう。

英雄王たる俺に不可能はない。

やはり作った方がいいかな。

しかしながら、俺は天界の書記官でもないので使えるかどうかかわからない。

残念だが俺はジーンズ一枚で戦うほど、酔狂ではない。

リクルートセンターに天界に関する職業ってあったっけ？

できれば係長ぐらいが希望なんだが……

多分ないだろう。

だが、やる気さえあれば何とかなるはず。

松岡 修造先生もそんな感じの事を言っていた筈。

今度作成してみるか。

次は隠蔽工作

実はあの時の戦いをネギがみていたのである。

どうやらナギが悪魔から助けた出した時に俺が家突き破ってドッコーン。

そのまま固まってしまったのだ。

つまり天使2人へのスーパー俺様フルボッコタイム（虐殺現場）を目撃してしまった事になる。

流石にコレは不味いので記憶をバッチリ細工しました。

ナギがギャーギャーうるさかったからボコボコにしてどこか知らない森に放り投げた。

ついでに過去の記憶も改変。

今までの過去を全て違う記憶に変えた。

具体的には俺に関する記憶についてだが。

勿論、アーニャやネカネ姉さんも然り。

今の皆の記憶には俺は

「紅髪で琥珀目、魔力も気もない英雄の落ちこぼれ。無愛想、根暗、人を馬鹿にする事が得意な人類最低な男」

という認識だ。

何故こんな事をするのか？

知りたい？知りたいの？

それは回想が終わったら話そう。

「いや、今は話そうぜ」

うっせ！こつちには話の流れがあるんだよ。

っていつか回想に入り込んで来るんじゃないよ！

そして後始末終了後は、そこら辺の珍しい道具を掻っ払いながら救助隊が来るのをまっていた。

回想終了

「という感じに成ります」

「そんな感じか」

そうシャリシャリと林檎を剥きながら答える彼。

一応怪我人なのでお見舞いのなフルーツの盛り合わせみたいのが置いてあり、それを剥いている。

「ほい」

「ありがとうございます。ってか何故にタメ口？おれ主人だよね？」

「じゃあ、「M・M」について分かった事を報告するぞ」

「え、無視？マジで？」

「今回の襲撃は「M・M」がやったことはまず間違いない。」

「おい、待て聞け」

「だが、企てたのはクルト・ゲードルじゃなくてアリカ姫の生存を恐れたM・M元老院議員達だ」

「いや、だからね」

「今回の襲撃の事については、クルト・ゲーデルは黙認し、処分やお咎め無し、だ」

「ちょ、おま」

「ああ後は今回の襲撃の主犯であるM・M元老院議員達のリストだ。それとこっちは襲撃に参加した魔法使いのリストー」

「待てって言うてんだよゴるあああああああ！！」

「うわっ！？」

俺は耐えきれず思いつきり叫ぶ。

俺はよく耐えた。だが我慢の限界って言うのがある

そして彼の胸ぐらを掴み上げて

「何おまえ！？俺への忠誠心が全く足りないんだよ！？どうしたらそんな態度が取れるんだよ！！？」

「ギブ、ギブ、ギブアップ！！！！」

「テメエのその腐った《性剣》を切り落として代わりに忠犬ハチ公の石像をくっつけてやるよ！！そうすれば少しは俺への忠誠心が湧き出るだろうよ！！！！」

「マジ勘弁して。お願いだから、いやお願いしますから！敬語使い

ますから！！忠誠しますから！！！！だから勘弁してください！！！！」

「よし、なら許す」

エリクは胸ぐらを掴むのを止め、ベッドに戻る。

「なあ、ところでなんで記憶をあんなのに変えたんだ？」

「はい、そこ敬語使え。」

「まあまあ、変えるならさもつとイイ記憶に変えれば良かったんじゃないかったのか？」

「よし、忠犬ハチ公に西郷さんを追加しよう。今すぐそこに直れ」

「すいませんでしたー！！！！」

すぐさま土下座する彼。

その反応に満足したのか彼はすぐさま機嫌を直した。

「で、記憶についてだったか？わざわざ悪く、弱くしたのは訳があるってな」

「訳ですか？」

「そ、訳がある。悪くしたのはM・Mに俺はあまり使えない事を、弱くしたのは俺は力がありませんよ」と示すためさ」

「では身体的特徴を変えたのは？」

「それはな、つと」

エリクは《探求者の秘宝》から大きめの紙袋を取り出す。

そして封を開け中身を取り出し、ベッドの上にばらまける。

するとそこには幾つかの書類と、パスポート、そしてイギリスから日本の成田行きの航空券が一枚あった。

「少し前に日本にいる魔法人形に頼んでおいてね。色々準備してもらったよ」

「パスポートに航空券つて、日本にいくのですか？」

「そ。いやね、お前と違う魔法人形からね少し前から嫌な報告を聞いていてね」

「それが日本と何が関係するの？」

「関係大あり。なんとM・Mがね俺達を将来利用しようとする計画を立てているらしくてね。何でも今から俺達兄弟の「立派な魔法使いの従者」を選んで観察するらしくてね、それが――」

「日本ですか」

「そのとおり」

彼は納得した。

確かにここ最近そんな噂を聞いた事がある。

恐らく記憶の姿を変えたのはこの事が理由だろう。

だが、ここで疑問が残る。

「しかし本体様が行くような事ではないのでは？」

それだ。

何もエリクが行かなくても魔法人形さえ行かせればすむ話。

何故エリク自身が行くのか理解できない。

「別にその計画を邪魔するつもりはないさ。用があるのは集まる才能ある従者候補達さ」

「従者候補達……まさか」

「そ。俺の目的は只一つ。零崎を集めるためさ。」

ああ、なるほど。

彼は理解した。

そう、今回の日本へ行くエリクの目的は有能な零崎候補を集めに行く事だ。

「零崎一賊」は今エリク1人しかない。

零崎は彼の目標でもある組織だ。

それが組織なのに1人だけとはおかしいだろう。

つまり、今回集まる従者候補達をかつさらおうと画策しているのだ。

「ちなみに日本には何時行くので？」

「3日後。朝の日本直行便に乗り行く。日本では学生をするつもりだよ」

「場所はどこ？」

「場所？場所か。確かー」

此処から、

此処からこの物語は始まるのだ

「――麻帆良学園だっ たけな」

パスポートの下に挟んである紙にはこう書かれている。

《以下の者を麻帆良学園に通学することを許可する

麻帆良学園 初等部

天川・イーノック・エルシャダイ》

さあ

始めよう。

物語は開幕する。

4話 始まりの知らせ（後書き）

どうですか？

ネタは映画「ターミネーター」やら「プレデター」「300（スリーハンドレッド）」

ゲームでは「エルシャダイ」「ヘイロー」「Faet」

なんかです

今後は東方も書きますから遅くなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5724s/>

魔法先生ネギま！ 幸福を望むもの～

2011年6月4日22時54分発行